

日本國語大辭典

第十七卷

編集 日本大辭典刊行会

発行 小学館

日本国語大辞典 第十七卷

昭和五十年九月一日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第一版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相 賀 徹 夫

印刷者 小 林 清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二一三ー一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

編集顧問

金田一 佐伯 新 村 時 枝 西 尾 久 松 諸 橋 山 岸
京 梅 誠 潜 轍 德 平
助 友 出 記 実 一 次 平

編集委員

市 古 貞 次 金 田 一 春 彦 見 坊 豪 紀 阪 倉 篤 義 中 村 通 夫 西 尾 光 雄 林 井 栄 大 松 井 栄 一 馬 淵 和 夫 三 谷 栄 一 山 田 精 一 吉 田 精 一

(五十音順)

佐渡403相川に在り 長野県523 愛知県北設楽郡569 (一)
 ちやうの「信濃」
 びちやう ①軽い平たい物などが水面に落ちる音、また、水などが軽くはねあがる音などを表わす語。②平手でたたく音、ふくらんでいた物がつぶれる音、戸などをいきなり閉める音などを表わす語。
 *今年竹里見尊昼の酒「びちゃん」と、かう、その手をひっぱたく」(閑園) ①
 びちやうに「名」(形動) おしつぶされて平たくなるさまを表わす語。びしゃんこ。べちやんこ。(発音) ①
 ①
 ひちゅう ①「飛虫」[名] 空中を飛び回る虫。*自然と人生を徳富蘆花「湘南雜筆・新樹」限りなき飛虫(ヒチュウ)の雪の如く粉々として」(閑園) ヒチュウ ①
 ひちゅう ①「秘中」[名] 秘密にしている物事のうち。(閑園) ヒチュウ ① ②余之 ①
 ひちゅうの「秘中」(「秘密」ひみつ) 秘密にしているものの秘密、最も秘密なこと。非常に大事な秘密。*二人女房「尾崎紅葉中・五」これからは他聞を憚る秘中(ヒチュウ)の秘密(ヒミツ)」(閑園) ヒチュウ ① ②余之 ①
 ひちゅう ①「被中」[名] 夜具の中。ふとんの中。*藤原惺窩集「三才韻略意」枕上蛩吟霜下響、被中鷄唱曙天声」*即興詩人森鷗外訳「歌女「我は手を被中より伸べて拍ち鳴らし」(閑園) ①
 ひちゅう ①「鄙衷」[名] 自分の心をへりくだっている語。微衷。*新聞雜誌「二」明治四年一月「臣の鄙衷(ヒチュウ)を御洞察被」為在」*新聞雜誌「三」明治五年三月「敢て鄙衷を吐露する所以也」
 ひちゅう ①「尾虫」[名] ①吸血類の第一中間宿主内における幼生名。②原素動物、尾虫類の総称。オタマジャクシのような形をしていて、海中を終生浮游生活をする。(閑園) ヒチュウ ① ②余之 ①
 ひちゅう ①「美中」[名] 美のなか。美しい物事のなか。(閑園) ヒチュウ ① ②余之 ①
 ひちゅう ①に「刺」(一)あり 美しい花にとげがあるように、美しいからといって油断してはいけないことをいう。*青年森鷗外「四」美中に刺ありともいふべき批評の詞を浴せ掛けるとは」
 ひちゅう ①「微忠」[名] 少しの忠義。また、自分が忠義を尽くしたことを、へりくだっている語。*源平盛衰記四四「時忠卿罪科「此れ命を扶けむと為と雖も、又微忠(ヒチュウ)にあらずや」*近世紀聞「桑崎延房「三二」(微忠(ヒチュウ)のほどは殿下にも能々知ろし召れつらん」(閑園) ヒチュウ ① ②余之 ①
 ひちゅう ①「微衷」[名] 自分の本心、まごころをへりくだっている語。微意。微心。*新聞雜誌「八」明治四年七月「区々の微衷、御採用奉願候」*瀧口入道「高山樗牛「三二」故内府が御恩の万分の一に答へん滝口が微衷」(閑園) ヒチュウ ① ②余之 ① ③余之 ①

ひちゅう【鼻中】(名) 鼻の中。鼻の内部。＊譬喩八
八「鼻中ヒチウの白毛は閻王の使」＊洒落本・青櫛
星之世界錦之裏後叙述、は眼中西施を出し、悟れ
ば鼻中臭氣をいたす」 〔開国ビチュー〕 繪之図
ひちやう【鼻柱】(名) 「はなばしら(鼻柱)」に同じ。
〔開国ビチュー〕 繪之図

ひちゅう【鼻紐・鼻鈕】(名) 把手とつて。つまみ。また、印鑑や鏡などで穴をうがち紐を通すように作ったつまみ。＊航米日録「四横一面に板を釘す、其板に鼻紐を設け、而して其房中に入出す」＊輦耕録卷三〇「印章制度、千石、六百石、四百石至二百石以上、皆銅印鼻紐、文曰「印」

ひちゅう【備中】「びっちゅう(備中)」に同じ。＊色葉字類抄「備中「ヒチウ」 〔國産色葉・伊宗・腰頭〕
ひちゅうかく【鼻中隔】(名) 鼻腔の中央にあるしきり。 〔開国ビチュールカク〕 繪之図

ピチュリー(名) (英:blumen) 天然に産する炭化水素類、またはそれらの非金屬誘導体などの混合物の総称。原油アスファルト・石炭の類。瀝青(れきせい)に似る。 〔開国繪之図〕

ひちゅつ【罷黜】(名) 官職をやめさせ、退けること。＊横井平四郎宛吉田松陰書簡「嘉永六年一月二十六日」「就中井上は屢々政府に登り、又屢々罷黜せられ」

ひちや【匕箸・匕筯】(名) さじとはし。執して食事・顔氏家訓「風操、箕箒匕箸、咳唾唯諾、執燭沃盥、皆有節度」

ひちよを失う 食事中持っていたさじとはしとを奪取り落とす。非常に驚くさまをいう。＊蜀志「先主伝「曹公從容謂先主曰、今天下英雄、惟使君与操耳、本初之徒、不足数也、先主方食、失匕箸」

ひちよう：チャウ「日帳」(名) その日の事を記した帳簿。日記帳。＊浮世草子・好色一代男七目録「諸分の日帳、新町木の村屋和昶事」＊随筆多波礼「草一」「いづれの国にも日帳(ヒチャウ)日記などいひひやかかしるしおく事あり」 〔開国ヒチョー〕 繪之図

ひちよう：テウ「飛鳥」(名) 飛ぶ鳥。空を飛ぶ鳥。＊凌雲集「三月三日侍宴賀陽豐年」「飛鳥番々遇」＊和漢朗詠「上落花暮(ゆふべ)には飛鳥に随つて一時に帰るへ白居易」＊花鏡「無声為恨、飛鳥の風にしがふよそはひなるべし、是を舞と云」＊易経「小過卦」「飛鳥遺之音、不宜上宜下」 〔開国ヒチョー〕 繪之図

余之回 〔國産圖文〕

ひちよう 尽きて良弓(りょうきゆう) 蔵(かく)る 蔵(かく)る 【蔵(おさめる)】 (韓非子・内儲説下)、「吳越春秋・夫差内伝」などに見えるたとえ、捕えるべき鳥がなくなると弓は仕舞われてしまう。敵国を滅ぼすのに功のあった謀臣も用がすめばいらぬもののように思われて殺される。用のある時は使われて用がなくなると捨てられるたとえ。狡兔(こうと) (こうと)死して走狗寒(に)らる。＊歌舞伎・星月夜

見聞実記(荏柄の平太) 序幕 飛鳥尽きて良弓隠る世のたとへ」*歌舞伎・会稽源氏雪白旗・中幕「狡兎死して走狗烹られ、飛鳥尽きて良弓蔵めらるるの喩の如く」。*史記・越王勾踐世家 蜚鳥尽、良弓藏、狡兎死、走狗烹」

ひちようの翔(かけ)り 飛鳥が空を翔(か)けるように動作のすばやいこと。*大観本 謡曲・熊坂坂鳥の翔りの手を破き、攻め戦へば」*浄瑠璃本 架三国志 志 男神 皇后(飛鳥(ヒチウ)のかけり虎ばり、手を尽くしてぞ戦ひける」

ひちよう 懐(ふところ)に入(い)る時(とき)は狩(か)り(かりゅうど)もこれを捕(と)らず 困窮した者が助けを求めてやって来た時には、これを助けてやるのが人情であるというたとえ。窮鳥(きゅうちう)きゅうちう(きゅう)懐に入れば猟師も殺さず。*浄瑠璃 釈迦如來誕生会 三「飛鳥懐に入時は狩人も是をとらぬといひは、情を知れと世のしめし」

ひちよう : テウ【飛超】^{〔名〕} 飛びこえること。*花柳春話 織田純一郎 歌三三「鞭を加へ馬を躍らして之を飛超(ヒチウ)す」*左思・吳都賦「狻麋蹀然、騰超飛超」^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ひちよう : テフ【飛蝶】^{〔名〕} 飛んでいる蝶。*作文大 体「飛蝶上花心」*日葡辞書「fado(ヒチウ)。トブチウ」^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ひちよう : テフ【秘帖】^{〔名〕} 秘密のことを書くための手帳。また、秘密のことを記録した帳面。^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ひちよう : テウ【悲調】^{〔名〕} 悲しげな調子。悲しい音調。*性霊集 一〇・故贈僧正勤操大德影讚 男女角弁発心、華野志産設会、職悲調之感也」*小春・国木田独步「今や人情の幽音悲調に耳を傾けたり」*幸朝・小林秀雄「それが、彼の真率で切実な秀歌の独特な悲調をなしてゐるのである」*謝靈運 山居賦「憶崑園之悲調、慨倫倫之哀篇」^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ひちよう : テウ【美鳥】^{〔名〕} 美しい鳥。*西京杂記「増山守正 初下「インコウ」と唱る鳥あり。又略極めて美鳥にして」^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ひちようきん ヒチウ : 筋【筋】^{〔名〕} 下腿のうしろ側の最表層にある筋。ふくらはぎにあり、足を曲げる働きをする。^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ひちようきんけいれん ヒチウ : キン 筋【筋】^{〔名〕} 筋腸筋に起こる痛性の痙攣。静脈の鬱滞、過労、循環障害などによって起こる。こむらねがえり。^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ヒチョーキンケイレン 筋【筋】^{〔名〕}

ひちようせい : テウセイ【微調整】^{〔名〕} テレビで、チャンネルを合わせた後で、画像を最も見やすい状態に整えること。転じて、一般にだけ調整することにもいう。^{〔名〕} 飛超(ヒチウ) 飛超^{〔名〕}

ひちようぼし【七曜星】^{〔名〕} 北斗七星。長野県諏訪 524 静岡 552 (ひちそう) 伊豆八丈島中之郷 39

ハセシナ（ハシ）の
竹管に、前面に
七個、後面に二個の指穴をあけ、指穴を除いた部分に
樺の皮を巻き、上端の部分に蘆舌したをさし込む。



筆 葉

って、電気燈を点けた」★足袋の底、徳田秋声「四」花が初まつてゐた。どうかするとびちりと云ふ札の音が耳についた」②「びちり」に同じ。★雲喰ふ虫へ谷崎潤一郎「大団子のやうな堅い白足袋をびちりと嵌めた足頭が一すばかり見えた」**〔開道儀を〕**ひちりき**〔舞〕**雅楽用の管楽器。大と小とあつ

蘇郡 938
 びちり『副』①「びちん」に同じ。*薤露行へ夏目漱石、
 二「びちり」と音がして皓々たる鏡は忽ち真二つに割

ひちらく『自カ四』はちぎれそうになる。ふくれる。肥満する。★史記抄一四・十二経路略肥へひちらいて、身をもはたらかさず」

ひちらまいす『名』因言人へつらう者。おべっか

たくして焼いたもの。ひつら。・十卷本和名抄「四
「饅饅 唐韻云饅饅入畢羅二音亦作饅饅 俗云比知
良ノ饅名也」・観智院本名義抄「饅饅 ヒチラ」・厨事
類記調備部(裏書)「饅饅 ひちら。畢羅二音亦作饅

「びちよびちよ」に同じ。＊良人の自白（木下尚江文六・一）「ビチヨリビチヨリと水溜を踐（ふ）む足音がして」
【発音】ビチヨ
ひちら【輝耀・輝耀】《名》唐菓子の一つ。糯米（もち

世ものびちょびちょ切た下駄提て」
や水などにひどく濡れ通るさまを表わす語。びしょ
びしょ。「びしょびしょに濡れた服」

びちよげる **【動】** 方言 つぶれる。おしつぶされる。秋
 田県北秋田郡154《ひちよげる》青森県南部地方118
 びちよーびちよ **【副】** 雨がたえまなく降りつづける
 さま。また、雨や水などに濡れながら歩くさまを表

線に対する称。〔発音〕ヒチョーワヒ〔備〕フ
ひちよく〔秘勅〕〔名〕秘密に発せられたみことのり。
〔発音〕ヒチョウ〔〇〕
ひちよく〔形動〕万言物おしりするさま。けちなさ

ひちようわひ、ヒテウワ、【非調和比】【名】 一直線上に
 四点 A、B、C、D があるとき、 AC/CB と AD/DB
 との比の上記四点に対する称。また、一点 O を通る
 四直線 $OA \cdot OB \cdot OC \cdot OD$ があるとき、 $\sin \angle AOC / \sin$

龜一年。○月丁亥、或入道元由、披陳不明。隨筆折
 たく柴の記下、雜掌等が申行ふ所にはあらざる由を
 披陳ありければ、唐律疏義、關訟、遼軍駕、搥鼓訴事
 「軍駕行幸、在路遼駕申訴、及於衛關之下、搥鼓以

（ふんとし）に、用いられたところから）商売女は
鬼より恐ろしい。＊雑俳・柳多留三五「餅ちりめん
虎の皮よりおそろしい」
ひーちん「日賃」《名》一日の賃金。日給。＊連歩色葉「日
賃ヒチン」
ちんちん「披陳」《名》①思いをかくさず述べること。

まりまくれて」＊滑稽本・浮世風呂「三・下」緋縮緬（ヒ
ヂリメン）の裾裃」〔発音橋ノ〇シ〕京ノ〇
ひぢりめん虎（とら）の皮（かわ）より恐ろしい（緋

和歌山市 676 徳島県 805 《ひちりけんばい》徳島県 804
 ひちりめん【緋縮緬】《名》緋色のちりめん。多く婦
 人の長襦袢（ながじゅばん）・腰巻などに用いる。*仮
 名草子・竹斎「上」御衣はひちりめん」*浮世草子・好

門府生正延 筆筭吹・源平盛衰記二五、時光茂光御
方違盗人事・市尤(いちのぜう)茂光と云筆筭吹(ヒチ
リキフキ)あり」〔発出〕(標下)
「ちりけっばい」〔名〕(方)「しちりけっばい」の変化

の吹奏を学習する者。*三代格・四・嘉祥元年九月二
 二日・太政官符・唐楽生六十人・略・箏・篳篥生四人〔寛
 治〕
 ヒチリキシヨ〔鑑〕王
 ひちりきゝふき【箏篳吹】『名』箏篳を吹く人。箏篳を

える教師。＊三代格。四・大同四年三月二日・太政官符「唐楽師十二人 横笛師・合笙師・簫師・箏篳師」＊癸心集。六・時光茂光教吉及天聰事「茂光と云箏篳師（ヒチリキシ）と囲碁を打て」〔癸心集〕 〔壬〕

チイキイの意で、吹く音から〔言元梯〕。〔究首金まじ〕シ
チリキ(岐阜・鳥取)スズリギ〔津軽語彙〕。〔徹〕〇〔乙〕
今史平安〇〇〇〇〔余〕〔乙〕〔古詩書〕和名・色葉・名義下学・
和玉文明・伊京・天正・饒頭・黒本・易林・書言

書楽図云大箏篋小箏篋入畢栗二音俗云比知利岐▽
 ＊源氏・若紫例の、ひちりき吹く隨身、笙の笛持たせ
 たるすきものなどあり」關西説悲篋の義で、その音が
 が悲壯であるところから「塵袋・大言海」。(2)ヒチリツ

だもの、西アジアに起こり、日本には奈良時代初期に中国から伝来した。音は鋭く、哀愁を帯びる。その大きく、長いものを大筆簾というが、平安中期には廃絶。簾簾。ひりき。●西大寺資財流記帳宝龜一一年

歌山県那賀郡681 (しつ)富山県礪波437 ③まげ物の弁
 県970 ②飯びつ。おはち。滋賀県蒲生郡050 但馬039 和
 もち。徳島県805 香川県044 長崎県南高来郡926 鹿児島
 語。〔隠語輯覧〕 〔因言〕①衣服を入れておく箱。なが

〔鍾(かね)匱(ヒツ)を朝(みかと)に設けて詔して曰く〕・万葉一六・三八一六・家にある櫃(ひつ)に鑲刻(きざ)して蔽(おほ)ふの奴(の)つかみかかりて・八種(やくしゆ)貴(き)比(ひ)・十卷本(じゆけん)和名抄(わなしょう)の櫃(ひつ)・蔭切切韻(いんけつぎん)云(い)櫃(ひつ)八音(はつおん)皇子(みこ)・俗(よこ)有(あ)長檣(ちやうきやう)韓(かん)檣(きやう)明(めい)櫃(ひつ)檀(たん)檣(きやう)等(とう)名(な)・似(に)厨(くりやう)向(むか)上(うへ)開闔器(かいかんとく)也(なり)・源氏(げんし)・明石(あけいし)御衣(みえ)ひつあまたかけ、たまは

る」など。

つ【櫃】《名》①上に向かってふたのあく大形の箱。
長櫃・折櫃・唐櫃・小櫃など。また、飯を入れる木製の

【引】「接頭」(接頭語「ひき(引)」の変化したもの)動詞の上につけて、勢いよくする意を添えたり、語調を強めたりする。「ひっかく」「ひっ

 ひちんども

ちんども『名』婦人の帯どめ・腰帯を固く締めるために用いられる金具。ばちん。＊改正増補和英語林集成『Pechindome “バチンドメ”』(発音)



眞似似紙)

「ちんじょう」：ジャウ【披陳狀】『名』訴狀に対して申し開きするために出す目安状。陳狀。披陳。★高野山文書「阿氏河庄証文目録案大日本古文書五・一・一三六」通 高野所司披陳狀案【発首ヒテンジョー

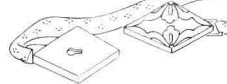
いよく打ち当たったり、折れたりはねたりなどして響く音、またそれを表わす語。びちり。＊あらくれ(徳田秋声)五三「花がはじまると、びちんびちんと云ふ札の響が」＊明暗(夏目漱石)七一「其上からびちんと

また、毒毒は、見た目に美しいものほどかえって激しいことのたとえ。＊佳人之奇遇へ東海散士＊一三、薬石未だ美疾に中らず、親戚更に仏の良医を迎へしむ＊
＊任昉・答劉孝綽詩「九折多美疾、匪一報庶良藥」＊

ひんちゃん【美萩】(名)「春秋左伝・襄公二三年」の「季孫之愛、我疾狄也、孟孫之惡、我棄石也、美萩不如棄石、夫石猶生我、萩之美、其毒滋多」から、美しいが毒となるもの。いたずらに人に好意を示すことは、

求ニ聞一及上表披陳身事、此三等如有不実者、各合ニ杖八十。②「ひちゃんじょう(披陳狀)」の略。

・高野山文書・建治二年六月日・阿氏河庄地頭湯浅宗親陳狀案(大日本古文書五・一三二)「仍重披陳如



びちんどめ〈鶴真似双紙〉

【匹匹】①つれあい。なかも。つれそう。匹偶、匹耦、匹儕、匹儕、匹敵、匹配、儷匹、仇匹②ただ一つの身分の低い。匹馬、匹夫、匹婦／むひつ(匹)

畢命②二十八宿の一つ。牡牛座付近。畢昴
ひつ(畢)
〔緯〕①しばや竹を編んだもの。箒門閨竇、箒路監
②箒葉は、管楽器の一つ。ひちりきと。
〔譯〕① 貴人の行列のさきばらい。譯御／警蹕、前蹕
〔駐蹕／譯路〕 ひひつ(蹕)

【諡】①声や物音がしない。静か。／諡諡／静諡、寂諡
／②やすらか。／安諡／

ぜひとも。覚悟のさま。必死、必勝、③なければならぬ。必要、必携、必見、必需、必修、必須、必読、必用、必罰、必ひつ(必)

【必】①かならず。間違ひなく起こると予想される

をさし込むための穴。・土長塚節^七「其の唐鐏の四角な穴の処が俄に緩んだ。其処はひとつといはれて居る」^{〔方言〕}愛媛県⁸⁷ 高知県土佐郡⁸⁴ 岐⁹³

說左上「楚人有下壳其珠於鄭者」為「木闌之櫃」，董以「桂椒」綴以「珠玉」，飾以「玫瑰」，輯以「羽翠」，鄭人買其櫃而還其珠，此可謂「善壳櫃矣，未可謂「善鬻珠也」。

色・業・義・和・玉・文明・伊京・明応・天正・饒順・黒木・易林・書言
ひつを^①買^②いて珠^③(たき)を^④還^⑤(かえ)す(器を買つて、その飾りについていた宝珠をかえしてしまふ意で)物の良否の鑑別ができないこと、尊ぶとこ

ら(名語記)。(5)ヒマツム(隙積)の義(名言通)。(6)ヒ
チ(檜曲)の義(言元梯)。**〔発音全ま〕**シジ(津輕こと
ば)シチ(津輕語彙)シツ(富山県・富山磯波)スツ(富
山県)ヒーチ(島原方言)ヒッタ(岐阜)ヒッツ(志摩

当入れ。岩手県紫波郡見前014《ひっこ》宮城県栗原郡
41 蘭語(1)入れておいたものがイヅルところからイ
ツの義。イとは通ず(日本釈名・紫門和語類集)。(2)
とは樋の義。ツは助語(東雅)。(3)引キツルの義(和訓

中にとどまる。・左思、呉都賦、弭節領嶺、齊、鑄
駐蹕」

ひつ【畢】二十八宿の一つ。西方に位するもの。おうし座のエプシロン星付近の星宿をいう。畢宿(ひつしゅく)。あめふりぼし。・二中曆一五、乾象廿八宿略、奎、婁、胃、昂、畢、觜、參、西、制度通一、奎、婁、胃、昂、畢、觜、參の七宿、その並びやう虎の形の如し」

ひつ【讀】異林、ひつ【字音語素】

ひつ【漢】自タ四・自タ上二・他タ下二」ひひず(漬)ひつ(漬)他タ下二(すつ)捨)の変化した語)捨てる。・俳諧、太紙句選、春皮ひてし機多に入江や蘆の角」

ひつ【名】好色で、しつこいこと。しつぷか。・西落本風俗抄弘伝「今夜の客は新ござのくせに大のびつさ」

びつを働く 好色な行為をする。・西落本・寸南破、良意「新ござ」はからし、よしねへ「略」といはれども色々ひつをはたらく」

ひつ【あつ】【筆匠】【名】文字を書くときに筆やペンなどに加わる、押える力。【開國篇】

ひつ【い】【筆意】【名】①連筆のおもむき。書画のおもむきや味わい。ふでづかい。・文明本節用集「筆意、ヒツイ」・隨筆・槐記「享保一二年閏正月二八日「佐理行成などは、へ略和漢ともの上筆の筆意骨子を、能々には雪を喜ぶ仲ころが二匹、大川端小山内蕪八「裾」には雪を喜ぶ仲ころが二匹、筆意を見せて染めてあった」・唐書・魏徵伝「魏叔瑜へ略善草隸」以「筆意、伝其子華及甥辨稷」②文章のおもむき。文章の筆づかい。・人情本・春色恵の花「一〇回「錦の裏、鳥の槽粕にて、故人山東庵の筆意に耽べ」・春雨文庫・和田定節四編「序「父の恩てふ春雨文庫は松村先生(の筆意、ヒツイ)に生じて」・安愚衆鍋飯名垣魯文三序小野涼亭「談笑諷諷の筆意(ヒツイ)に感あり」

【開國篇】 固譯書文明

びつ【い】【尾椎】【名】脊柱の尾部に位置する椎骨。【開國篇】

ひつ【て】【日次】【名】暦の上での日の吉凶。日どおり。日から。日なみ。・源氏、藤袴御服も、この月に脱がせ給へきを、日ついでなん、よろしからざりける」・榮花鳥辺野、日ついでなど選らせ給ひて」・古本説話集「二八日野日であして、二三日あたるに」

ひつ【いり】【名】女をいう、盗人仲間隠語。(日本隠語集)

ひつ【う】【湿】【名】(しつ)【湿】の変化した語)「ひつ(湿)」に同じ。・西落本・双床満久羅手をつかまへ、ひつ「う」あやまる、ひつうかいてるぜ」

ひつ【う】【悲痛】【名】(形動)悲しいいたむこと。心から悲しむこと。また、その上もなく悲しいたましいこと。また、そのさま。・書言字考節用集「九、悲痛、ヒツウ」・自由之理中村正直歌四「吾等これを悲痛

し、或はこれを嫌惡すれども」・花柳春話(織田純一郎記)付録二「今フロレンスを失ふて悲痛ヒツウに耐す」・史記(淮南王安伝)「百姓悲痛、相思欲爲亂耐者十家而已」(関田ヒツ)〔名〕〔書〕〔余〕

ひつーおや【權親】(名) 江戸時代、浅草観音の境内で楊枝や茶筌を商った店のうち、特に、古くから営業していた主だった店をいう。古くは、一軒の店を張らず、境内に小長櫃などを置き、その上に品物などを並べて売ったところからの称。役店。俗事百工起源簿「浅草楊枝店始原」・随筆「守貞漫稿」二四「江戸浅草観音堂前より山門の間両辺は茶店など楊枝店多し。其中に十余店櫃親(或云役店とも)と云あり。略」・当堂追離の鬼に扮する者今も櫃親を役す」

ひつか【名】(名) 扇斜視。やぶにらみ。福島県相馬郡174新潟県三島郡419

ひつか【筆下】(名) ふでさき。また、ふでで書くこと

一経国集一四「清涼殿面壁山水歌(嵯峨天皇、野下山生千仞危)・俳諧(鷹筑波一三「つくつくしある野の岩は筆下(ヒッカ)哉」正観)・潘岳於賈誼坐講漢書詩「筆下摘藻、席上敷正」

ひつか：クツ【筆花・筆華】(名) 文章上のあや。美文。また、美しい詩歌。・日葡辞書「Figuera(ヒツワ)」。フデノハナ(歌)美しい文体。歌語「常山文集十九七絶「世徳伝来虎豹韜、随風千里筆花香」

ひつか【筆架】(名) 使ったふでをのせかけておく台。ふでかけ。筆床。筆格。・看聞御記の永享七年九月三日「夜侍・経打・囲碁・予勝・筆架一八胡銅龍」持「経進」之」・日葡辞書「Fidea(ヒッカ)」。すなわち、フデヲモタスルダウグ(歌)筆を置いたための金属製の道具で、形は蛇に似たもの」・浮世草子「好色一代男五七「四尺の長机に書院硯・筆掛(ヒツカ)・香箱」」(関田ヒツ)〔名〕

易林 書言

ひつか：クツ【筆稿】(名) 著書や発表した記事、論説などが、官府の忌諱(きい)にあふれて、処罰を受けること。(関田ヒツ)〔名〕〔余〕

ヒッカース・カバさ【一硬】(名) (ヒッカースは英人Vickersから)比較的たい材料を対象とした硬度表示法の一つ。研磨した資料に、頂角一三六度の角錐形のダイヤモンドを押し込み、くぼんだ面積から硬度数を得る。ビッカース硬度。(関田ヒツ)〔名〕

ヒッカース・コード：カウド【一硬度】(名)「ビッカースかたさ(一硬)」に同じ。(関田ヒツ)〔名〕

ひつかい【筆海】(名) ①文字の多く集まっていること、すなわち、詩文。文章。・懐風藻「秋日於長王宅宴新羅客・背祭王行文」・鹽屋開筆海「攀桂登談叢」・本朝文粹九「速念賢士風詩序(官原文時)遂使三詞

筆架(婚礼道具諸器形式寸書)



筆架<婚礼道具諸器形寸法書>

賦簾頗弁玉石於山之阿、引序篇辭。分、經涇渭於筆海之岸と、楊炯原州百泉縣令李君神道碑「文場筆海、燭爛等」於星辰、弁園談義、鏗鏘協於風雅（二）硯名（スズリノ）異称。・易林本節用集「筆海、ヒツカイ硯名（スズリノ）」③ふでを入れておくもの。ふででいれ。・紅樓夢第四〇回「各色筆筒筆海内、插的筆如三樹林一般」〔註〕易林

ひっかい：かひ【引買】「名」万引をいう、盗人仲間のこと。隠語。〔隠語輯覧〕

ひっかい：タツイ「密懷」〔名〕男がひそかに他人の妻と、また、夫のある女が他の男と通じること。姦通。みっかい。・御成敗式目三三四条「密懷他人妻」・上杉家文書（年未詳）七月二九日・上杉謙信輝煌書狀「夫写（大日本古文書三・一九八）〔織部佐佑使佐山与申使ヲ Bicpai（ビツクワイ）スル」〔註〕國文文明・續編・黒本

ひっかえし：かへし【引返】「名」（ひきかえし）（引返）の変化した語。①引き返すこと。もとへもへし（引返）のこと。②衣裳の仕立方の一つ。婦人の衣服のそで口とや裾回しに表と同じ布を用いるもの。ひっかえしうら。・浮世草子・好色二代男一・五・上にかびたんのゆ。玉子色なるをひっかへしに、黒糸のぬいもん。・滑稽本・浮世床初上「一枚が引返（ビッケ）して腹裏は紅絹の真新しい奴よ」・随筆・守貞漫稿「二・表裡同色にして色同物なるを略京坂にては引返しと云、無地にして小紋及烏などのは京坂にては無駄と云」③歌舞伎で一度幕を引いて、下座（げざ）音楽や拍子木でつないでおいで、急いでまたあける、場面の転換方法。ひっかえしまく。・雑俳・柳多留八「引かへしのも幕で明智してやられ」・歌舞伎・靈驗付我離八幕「佃の騒ぎにてよろしく幕幕のうち時の鐘、佃の騒ぎに引（ヒ）返（カ）へし」④髪のかき方の一種といふ。・評判記・色道大鏡三「髪のかき（ゆ）いやは、嶋田わけ・兵庫わけ・略・弁（かう）かへしくずし・ひっかへし・ことかな」⑤ひきかえし引返。〔註〕

ひっかえしうらひっかえし：【引返裏】「名」ひっかえし【引返】②に同じ。〔発音備考〕ひっかえしまくひっかえし：【引返幕】「名」ひっかえし【引返】③に同じ。〔発音備考〕ひっかえす：かへす【引返】（ひきかえす）（引返）の变化した語。①（目サ五四）もにもどる。もどもどってくる。ひっかえる。・保元中・白河殿攻め落す事「敵引返すと見てければ」・古今集遠鏡五「どうぞひっかへして来て此通りにサあはうわい、さててもまてまあのこりおはいことかな」・露芝久保田万太郎五「おたみが茶道具を持って引返す」〔他サ五四〕①もいた所へもどらせる。・日葡辞書「ウエヲ fiteayasu（ビツカエス）、または、ウエマノタツナヲ fiteayasu（ビツカエス）」②歌舞伎

で、一度幕を引いて、下座(げざ)音楽や拍子木でつないでおいしたものを、再び急いであける。歌舞伎・四天王・楓江戸粧(しん)・土時の鐘にてツナギ、すぐ引返す。〔発音〕フナギ 余之回

ひっかえる：かへる【引返】「自ら四」ひっかえす(引返)に同じ。・日葡辞書「Ficacari, eru, etia(ナツカエル)に訳、大意で後退する」

ひっかかえる：かへる【引替】「他ア下(ハ下)一」因ひ用した。・「ひかかえる(引替)の変化した語。・日葡辞書「アク、または、アクシツン ficacunt ヒッカユル」(訳)能などの登場人物がするよう、衣服をとりかえる。・滑稽本・浮世風呂「三下」自由さんめへにとり替引替(ヒツケ)へ買立るし」〔発音〕フナギ 余之回

ひっかかへる：かかへる【引抱】「他ア下(ハ下)一」因ひつかかへる(「他ハ下二」)のひとは接頭語、抱くようにしてかかへこむ。わきの下などに、しっかりとかかえる。ひきかかへる。・浄瑠璃・嵐山姥「一尺に余りし四角柱、二本を二人が面々にひっかかへて」・多情多恨・尾崎紅葉前「一」鞭を手早く引抱(ヒツカカ)へて」〔発音〕フナギ 余之回

ひっかがみ【福名】(ひきかがみ(隠匿)の変化した語)「ひかがみ【福】に同じ。・日葡辞書「Ficagaga(ヒッカガミ)・交隣須知「一」身部【福】アムコトヲトウクアムンタニヨリ ヒツカカミカイタミマシタ」〔福音〕大分県大分郡83

ひっかかり【引掛引懸】①ひっかかること。また、そのところ。心理的な事柄についてもいう。・浮雲「二葉亭四迷二八」して見れば大丈夫かしら……が……とまた引懸りが有る、まだ決徹(さっぱり)しなない」・「明暗夏目漱石「一四二」には此間訪問した時からの引掛(ヒッカカ)りがあった」②かかわること。関係。掛連。・末枯久保田万太郎「その妓は何か柳蔵の遠い引っかかりになつてゐるのだったか」・「今年竹見里彈片輪な子一二ちよつとでもひっかかりのありさうな事実」〔福音〕フナギ 余之回

ひっかかりがまし【形】福音〕フナギ 余之回

ひっかかる【引掛引懸】「自ら五(四)」(ひきかか)る(引掛)の変化した語「①物などにかかつてそこにと止まる。妨げられて、そこに止まる。・日葡辞書「キルモノガクギニ ficacata(ヨッカカタ)」・滑稽本・浮世床「二下」葱鴨(ねぎとり)の葱や、卓袱(しつぷ)ぼくの芹が、本田の鬚節まげぶしに引掛(ヒツ)カカつてゐるからいいぢやあねへ」②関係がつつぬ。めんどろなことなどに、かかわり合う。また、計略などにはまる。だまされる。・安愚楽鍋(仮名垣魯文「三上」博覧会へ行くつもりだったが吉原の立退へ引ッかかつて」・「妻・本田山花袋六」金でも無くって、誰があんなお婆さんに引懸るもんかね」・末枯久保

田万太郎「うっかり横浜の景氣に引つ懸った」③
心の中にかたるものがある。すつきりしない感じが
もあとも云ひきらずにひつかかつて居ることやと
・こゝろ夏目漱石上・九「私の腹の中には始終先刻
の事が引つ懸つてゐた」〔開園〕金もシカガル〔津經語読本〕フツ
カガル〔秋田〕ヘッカカル〔岐阜〕〔金〕〔余〕
ひつかき〔引掻〕〔名〕ひつかくこと。またひつかい
て生じた傷。〔開園〕金も
ひつかかたさ〔引掻硬〕〔名〕硬さの一種。一定の形
のダイヤモンド片に荷重をかけて、試験面に押しつ
け、動かしてできる傷の幅の大きさと荷重の大きさに
て硬さを定めたもの。ドイツの鉱物学者モースの方
法は鉱物の相対的な引つ掻き硬さに順位をつけたも
ので、1が滑石、10がダイヤモンドとなっている。
ひつかきます〔引掻傷・引掻疵〕〔名〕引つ掻いたあと
のようになちよつとしたきず。〔開園〕金も主
ひつかしけん〔引掻試験〕〔名〕ダイヤモンド片な
どで表面を引つ掻いて、その傷跡から金属やプラス
チックの硬さを調べる試験。〔開園〕金も
ひつかきまわす。まはし〔引掻回〕〔他〕サ五(四)「ひ
きかきまわす〔引掻回〕」の変化した語①激しい勢
いで、かき回す。また、乱雑にあちこちじくりくり
わす。吾輩は猫である・夏目漱石三「無茶苦茶に顔
中引つ掻き廻す」・渚・国木田独步三「写真箱を引掻
(ヒッカ)き廻(マ)す毎に」②わがまが勝手な振
舞いをする。物事の秩序や順序を乱す。〔開園〕金も
増添)〔開園〕金も②〔語讀書〕
ひつかく〔引欠〕〔他〕カ四「ひきかく〔引欠〕」の変
化した語①ものの一部分をこわす。一部を折り、
または削りて減らす。・太平記一八・谷堂炎上事
「秋尊御入滅の刻、金棺未だ閉じざる時、捷疾鬼と云
ふ鬼神、略御牙を一つ引缺ヒツカハて是をとる」
・淨瑠璃・女殺御地獄上「ヤちよこざいなけい六。
顯(えろ)骨ひつかいてくれべいと」②江戸時代、
女郎を引かせる。身請けする。・浮世草子・傾城禁
氣一三「太夫が以前に変はらぬ心ざし、見届けて
の上に引ヒツ)かき」〔開園〕金も
ひつかく〔引掛〕〔他〕カ四「ひつ)は接頭語、あ
ぶらをひつかく」の形で、足を組んで、酒落
本・遊子方言・発端「猪牙舟といふものは、あぶらをひ
つかき」③〔他〕カ下二「ひつかける引掛」。〔開園〕

ひっかく・引掻(「他カ五(四)」「ひきかく(引搔)」の変化した語。爪などは強くかく。●仮名草子・東海道名所記「三かゆは、ひっかくべいよ」。●西洋道中・陸栗毛伝名垣魯文・初下たかを呱(つめ)でひっかくいた紙で」・浮雲二葉亭四迷下二一〇「引搔(ヒッカケイ)てお遣りより引搔て」(発音論之四)金亨⑩

ひっかく・筆格[名] ①筆かけ。筆もたせ。筆架。
●陸奥蒙和襲美江南道中懷茅山広文南陽博士詩自私煙霞安筆格・独開封棧試砂牀。 ②筆法。
●淨瑠璃・菅原伝授手習鑑一・惣じて筆の伝授といつば、永字の八法筆名の十六点、名をそれぞれに云に及ぼす」(発音論之四)

ひっかけ・引掛引懸[名] ①ひっかけること。かけてつり下げること。●落本・青樓真廓誌一「古わたりさらさのひっかけの多葉粉入」 ②関係づけること。引き合いに出すこと。●南禅寺文書・文安二年八月一六日・遠江国初倉庄名主百姓等連署請文・風鎮時、國中平均憐郷ひっかけとあるべく候。 ③衣服の一番上にはおって着るもの。●人情本・春色恵の花二・一〇「御納戸山まゆの襦(ヒッカケ)。 ④「ひっかけむすび(引掛結)ひっかけおび(引掛帯)」の略。●真景累ヶ淵△三遊亭月朝△八四「黒糯子の帯をひっかけに締め」・義血俠血泉鏡花一「昼夜帯をば緩く引掛(ヒッカケ)に結びて」 ⑤相撲のきまり手の一つ。差しどくる相手の腕を両手でひっぱりこんでそのまま土俵外に出す技。 ⑥計略などで相手に陥れること。とだますこと。 ⑦花札で、同種の札が場の一枚を場の札と合わせてとっておき、残りの札を手に入れようとする。 ⑧釣糸の先からばりをつけて、鮎などを引っ掛けて釣る方法。 ⑨盗人仲間の隠語。④合鍵(日本隠語集) ⑥屋外に干してある洗濯物を盗むこと。(隠語輯覧) 内①漁具の一つ。擬餌針(ぎじはり)のこと。●静岡県小笠郡52 ②植物・すみれ菫。新潟県西蒲原郡吉田416 ③帽子の一種。鳥打(とりうち)。大分県北海部郡99 ④ひっかけしゃっぽ)大分市99 (発音論之四)金亨⑩

重(フカゲ)軽経語彙・論之⑩金亨⑩

ひっかけおび・引掛帯[名] 引っ掛け結びにした帯。ひっかけおび。●こりえ・樋口一葉「一引(ヒッ)かけ帯オビ」は黒糯米と何やらのものがひ物。●婦系図・泉鏡花後・二五「羽織などの引掛帯(ヒッカケオビ)、結び目が摺ずって横に成って」(発音論之四)

ひっかけかぶり・引掛被[名] 端をむすばないで、手拭を頭に引っかかるようにしてかぶること。●落洛書本・南極野路雀「ふ麻の手ぬぐひ、ひたいより引かけかぶり」(発音論之四)

ひっかけかわら・かはら「引掛瓦」[名] 瓦の一種。屋根から落ちないように、瓦根(かわらぎん)に引っかけるための突起を瓦尻につけた瓦。(発音論之四)

ひっかけさんがわら：サンがはら「引掛棧瓦」「名」棧瓦の尻の一端が裏側に折れ曲がり、これを野地の瓦棧にひっかけて瓦が滑らないようにしたものだ。

ひっかけひも「引掛紐」羽織の紐の一種。書生が好んで用いた長い白紐で、首にひっかけて歩いた。

＊当世書生気質「坪内逍遙」二「珍らしくもなき、編分の引懸紐（ヒツカケヒモ）を」〔発図鑑之図〕

ひっかけむすび「引掛結」『名』女性の帯の結び方の一つ。お太鼓に結ばないで、たらしめておくもの。ひきかけむすび。〔発図鑑之図〕

ひっかける「引掛引懸」「他カ下一」図ひっか・く「他カ下二」（ひきかける「引掛」の変化した語）①かけてつり下げる。突き出した物などにかけてぶら下げる。＊日蘭辞書「ナワヲクビニ fceagunru ヒツカクル」・咄本・鹿の子餅・新屋「竈口にひっかかながるる新を引上ぐれば」・俳諧・白雄句集一「梅が香や鮎ひっかち釣の糸」②無造作に集たり、海が香や鮎ひっかち釣の糸③無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸④無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑤無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑥無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑦無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑧無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑨無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑩無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑪無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑫無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑬無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑭無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑮無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑯無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑰無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑱無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑲無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸⑳無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉑無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉒無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉓無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉔無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉕無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉖無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉗無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉘無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉙無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉚無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉛無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉜無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉝無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉞無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㉟無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊱無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊲無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊳無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊴無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊵無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊶無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊷無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊸無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊹無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊺無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊻無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊼無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊽無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊾無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸㊿無造作に着たり、梅が香や鮎ひっかち釣の糸

③あれこれと関係つける。引き合に出す。＊評判記「かた道大鏡」一「外を我身にひっか、いひよる貞（かたち）をいふ」・詞葉新雅「ニヒツカケテセワヤクうしろむ」④水などを浴びせかける。＊多情多恨尾崎紅葉後・八・二「お鈴の顔へ、突然お留は手水を引洗ヒツカける」⑤酒などを一息に飲む。ひっかつかぐ。咄本・鹿の巻筆「四六酒四五杯ひっかけて」・唐詩選国字解「七言古一盃ひっかいたいきほひで」・思出の記徳富蘆花「四・五濁酒（に）こり」を引ヒツ）かけて居た老爺が」⑥他人の目をぬすみ、またはごまかして取る。ちよろまかす。＊浮世草子・浮世親仁形氣「三・五十両の金を、若旦那の用事に立たされた間に、つい引かけてかいくれお見えなされぬゆゑ」・歌舞伎・与話情浮名横櫛切られ与三・九幕「おれがあの代物を引かけて、やりくりにでも遣ったと思つて」⑦掛け代金を払わないでおく。また、ふたおす。＊歌舞伎・有松染相撲浴衣（有馬猫騷動）序幕「あいつらは因業ゆゑ、もつと引っ掛けて置くかい」・青春・小栗風葉秋二「其儘寄付かずに引掛（ヒツカ）けて了ふ」⑧相手をだまして自分の思うようにさせる。だましてよそへ連れ行く。たらしこむ。かどわかす。＊歌舞伎・外間詞女郎と艶一「二枚、引つかけて来い」・歌舞伎・箱根笠大郎也門七「齊が重木町に助ておった時、引つかけて」

引掛結



引掛結

けてうせた智め」・妻へ田山花袋二二「好い旦那さんをひっかけて、本当に旨いことをしたがね」⑨着物などを針などの出っ張ったものに掛けて、破り裂いて、かぎ裂きをつくる。⑩車などで人や物をひいてはね飛ばす。⑪逮捕する、捕縛する意の、盗人仲間の隠語。「隠語構成様式并其語集」(発音)金多シカグル・フカグル(津軽語彙) 金之因 金之因 ひっかく」(金之因 金之因)

ひっかか・さ・ぬ(引重)「他ナ下二」「ひきかさぬ(引重)」の変化した語。咄本・醒睡笑一六「ほのぼのと赤根の小袖ひっかさぬ島隠れ行くおいとひぞ思ふ」

ひっかじ・める(引拵)「他マ下一」(ひき)は接頭語)押しつける。おさえつける。・滑稽本・八笑人四・上「即功紙を張ったきん玉を見るやうに、ひどくひっかじめるせ」

ひっかじける【引撃】(動)因国爪でひっかく。千葉県山武郡25伊豆八丈島大賀郷310 静岡県志太郡561「ひっかじく」栃木県足利214 群馬県桐生235

ひっかすく・く・かく(引被)「他方四」(ひっ・かつく・とも)「ひきかすく(引被)」の変化した語。・巨海代抄一上「あの樵夫が破笠短簀ひっかついて孤峯岩下に飯たは」・多情多恨・尾崎紅葉後・九・「今は観念した駄で夜衣を引被ヒツカついた」

ひっかた【名】因国鳥。①ひたき鶴。奈良県69「ひっかたもんつき」埼玉県秩父242 ②きなき(黄鵠)。栃木・群馬両県030 ③あかはら(赤腹)。奈良県添上郡030 ④じょうたい(子鶴)。群馬県030 千葉県046 愛知県知多郡・奈良県宇陀郡・和歌山県高野030

ひっかた・げる(引担)「他ガ下二」因ひっかた・く「他ガ下二」(ひっ)は接頭語)勢いよくかつく。かつぎ持つ。また、さらう。ひきかたげる。ひっかつく。・狂言記・三人片輪・軽物蔵をあけて、引かたげ引かたげのくまいか・浄瑠璃・聖徳太子絵伝記一「門のとびらをひっかたげ嶋主がいがいをのせ」(発音)ヒツカタグル(金之因)

ひっかたまる【引塊】「自ラ四」(ひっ)は接頭語)一か所に寄り集まる。かたまる。・多情多恨・尾崎紅葉後・八二垣の隅に三株ばかりの一重山吹が引塊(ヒツカタ)うって乱脈に咲散して」(発音)金之因 金之因

ひっかたむ(引懸)「他カ下二」因ひっかたむ・く「他カ下二」(ひっ)は接頭語)「ひっかたむける」とも)勢いよく傾ける。・大淵和尙再吟・中江西海をひっ傾て尻居士を水責めにせめて。咄本・軽口御前男二・七「引ヒ」かたむけ呑(の)まれたれば」

ひっかつく・づ(引担)「他ガ五(四)」(ひっ)は接頭語)①勢いよくかつく。荒々しくかつく。・浄瑠璃・曾我会稽山一「母はね返し一放れ、大の男をひっかつき、どうど落す其聲」②うまくたます。すっかりあさむく。・滑稽本・八笑人初・「日暮里中の人をすっぱりひっかついだが」③婦女を誘拐(ゆうか

いする。かつぐ。・歌舞伎・三人吉三郎初買三幕「野玉に過ぎた器量ゆゑ、引(ヒッ)かつがれでもしやあしねえか」④ひつかける(引掛)⑤に同じ。・多情多恨・尾崎紅葉後・九・「呻々(うぐぐびと)呻夙で飲むで、慌忙しく大息を吹いて、又引被(ヒツカッ)いだ」〔面白ヒツカッく 會下〕

ひつかと〔副〕光るさまをいう。びかつと。・巨海代抄上「在るとき、雷雷の音信時分、壁間てひつかとするかと思ふたれば」・大淵和尚再吟中「其の日光活爪の程は、芦花家紅の辺にひつかとしたそ」

ひつかかなる(他ラ四)「ひきかなる」の変化した語。・日葡辞書「Fiteaganu, u, ultra(ヒツカナグル)」。・婦系図(泉鏡花)後・一三「引(ヒツ)かなぐつて、其の手中をはたと地に擲(なげう)つや否や」〔面白ヒツカナグル 會下〕

ひつかびつか〔副〕「びかびか」を強めた語。・淨瑠璃・南蛮鉄後藤目貫二「りばな侍が編笠きて京の方へびつかびつかける著物をきて」〔面白 會下〕

ひつかびせる〔光る著物をきて〕〔面白 會下〕

ひつか〔被〕「他サ下」・「ひきかぶせる(引被)」の変化した語。・機械・横光利一「頭の上から真鍮板の切片をひつ冠せて」〔面白 會下〕

ひつかぶる〔引被(他ラ五(四))「ひきかぶる(引被)」の変化した語〕①水、夜具、かぶりものなどを勢いよくかぶる。頭からやうにして入。・史記抄「一五寶田伝「頭巾をひつかぶりたやうにして入」・浮世草子好色一代男「三五さあお寝やれと申、こころえたと南かにしらにひつかぶり」②責任などを自分で負う。引き受ける。・咄本・鹿の子餅「尻女郎といとの仕ぞこない、若い者ひつかぶり」且那御免也」〔面白 會下〕

ひつかまう・かまふ〔引構(他ハ下二)(ひくは接頭語)どしりとかまえる。・史記抄「一三・鄭陸「好要書にひつかまて居るを云ぞ」・報恩録下「うしろにひつかまて押威してを云也」

ひつかまえる〔引構(動)〕面白①重々しく構える。氣取る。なかなかにひつかまえた人だ」山形県米沢沢②ひつかう(動)面白背に負う。「袋をひつかう」長崎県南高来郡2%〔ひつかう〕熊本県下益城郡94%〔ひつかう〕大分県99%

ひつかからげる〔引絡(他ガ下二)〕ひつかから・「他ガ下二」(ひくは接頭語)①全体を残らずまじめに。残らずひくるめる。・浮世草子・本朝桜陰比事「五八「家内ひつからげて、身代百目がものはなかり」②着物のすそをはしる。尻をはしる。・浄瑠璃・心中宵庚申上「裾七の図迄引(は)かけ」・滑稽本七偏人「三下「尻引(ヒツ)の図迄引(は)かけ」・売花翁・金露藤雨「雨にも風に裾引(ヒツカッ)ら」

ひつて〔略〕挽みなく働けは」面白着物のすそをはしる。香川県817 熊本県下益城郡94% 〔面白ヒツカラ

ゲル 禽之図
 ひっからまる【引絡】『自ラ五四』(「ひっ」は接頭語) 強くからまる。ぎゅっとからまる。また、物事が複雑に入り組む。こんがらかる。●行人・夏目漱石 兄二七【禽】事ながら風に引絡ヒツカラまつた日には一【引絡】禽之図
 ひっからむ【引絡】『自マ五四』(「ひっ」は接頭語) ①強くからむ。ぎゅっとからまる。②いろいろとこみいる。複雑で面倒になる。●歌舞伎 四天王楓 江戸粧三立向たか、むづかしく引つ揃(カラ)んで来た。●滑稽本・浮世風呂 四・上 双方にも引(ヒツ)からんだ綾はねえわ【禽】禽之図
 ひっかり【確】詐欺賭博(とはく)の一種をいう。詐欺師仲間の隠語。(特殊語百科辞典)
 ひっかり【副】(多く)とを伴って用いる。光のひらめき輝くさまを表す語。●天理本狂言・神鳴ぐわらぐわら、ぐわらぐわら、ひっかりひっかりと云て出て。●俳諧・玉海集 句下・雑「ひっかりとせしうてのこはいろ」とある神かときげばうすひきてう幸吟【因】
 〔因〕名 斜視。やぶにらみ。岩手県気仙郡132 仙台15 福島市174 山梨県南都留郡山中033(「ひっかり」仙台16 〔因〕讀書言)
 ひっかり【確】〔副〕(ひっ)かりの変化したもの(物の多いさま)。たくさん。福島県東白川郡棚倉174 千葉県取郡東部050 静岡県田方郡557
 ひっかり【副】(多く)とを伴って用いる。一瞬に鋭く、または、一だけ目立って、光り輝いているさまを表す語。ひっかりこ。●浄瑠璃・聖徳太子絵伝記 五「さしもの守屋眼くらみ、略見かへれば又ひっかり」にこりえ樋口一葉五「情は古紙祇の薄物に、螢の光ひっかりとする斗」【禽】禽之図
 ひっかりこ【副】(こ)は接尾語「ひっかり」に同じ。●童謡 俵はごころ野口雨情「お星さまびっかりこ夜の空でびっかりこ」
 ビックリング (Edward Charles Pickering エドワード・チャールズ) アメリカの天文学者。午線光度計を発明し、膨大な数の恒星の光度を測定、国際基準をつくった。一九一七年、ヘンリー・ドレーパー分光型星表を公刊。(二八四六一—一九一九) 〔因〕禽之図
 ひつかわ【名】(慣例) 京都府東山区山科の北東部に発し、東山の東側を流れて音羽川を合わせ、伏見区で宇治川に合する山科川の旧称。〔因〕禽之図 禽之図
 ひっかん：ツツン【筆管】〔名〕筆の軸。筆柄ふでづか。●西京雜記一「天子筆管、以錯宝為附、毛皆以秋兔之毫也」〔因〕禽之図
 ひっかん【筆管】〔名〕筆。また、文字・文章を書くこと。●本朝高僧伝二二三 京兆南禅寺沙門一寧伝「寧又文字筆翰持持格卑需、書者常盈門限」●徂徠集一四・藝之揚・推百世、執若管簪、独有筆翰風流足。師・管書陶侃倪文遠近書疏、莫不手答、筆翰如之。

流、末嘗墮滯^(一)

ひつき【筆記】(名)①書きしるすこと。書きとること。また、その記したものの記事。●書言字考節用集九「筆記 ヒツキ」。●随筆閑際筆記序「先師編作之閑際筆記者」・花柳春話織田純一郎訳「日に幾葉の書を筆記するを以て楽みとなせり」・思出の記(徳富蘆花)三二「其裁判筆記の出た新聞」・南齊書十文字丘巨源伝「筆記賤役、非殺活所待、開勸小説、非正判所寄」

②「ひつきちょう〔筆記帳〕」の略。●思出の記(徳富蘆花)一〇・一二「何ぞや唯(たった)三年の課程を踏むで、幾冊の筆記を拵へて」

〔発音〕ヒツキ シッ

牛〔静岡〕 ●余之① 国語鑑賞書

ひつき【日】【名】①太陽と月。●常陸風土記筑波(愛は)しまかも 我が子孫③ 高きかも 神宮か 万みや 天地の共(わた) 日月(ひつき)の共 万葉二〇四八六「天地を照らす日月(ひつき)の極(きはみ)無くあるべきものを何を か思はむ 淳仁天皇」 ②日月数時日。●万葉二・六七「朝こころに 御言問はさず 日月(ひつき)の数多まねくな りぬれ 柿本人麻呂」・万葉二二二〇「ひさかのたの天知らしめる君故に 日月(ひつき)も 知らず恋ひ渡る かも 柿本人麻呂」 〔発音〕ヒツキ ヱ 国語鑑賞書

ひつき【火付】【名】火のつきぐあい。●百鬼園隨筆(内田百閒)「百鬼園先生言行録・三・火つきの悪い吸殻を」 〔発音〕ヒツキ ケ 金之④

ひつき【名】因圓樹木といふ人たちはな(大明橘)。徳島県海部郡赤河内802《ぶつき》鹿児島県飯島974

ひつき【斗】「ひつきほし(斗宿)」に同じ。

ひつき【棺・柩】【名】(古くは「ひつき」)死体を入れ奉る箱。かん。かんおけ。●書紀景行四三年(北野本訓)群臣等(まちきむたち)因よりて以ちて其への棺椁(ヒツキ)を開(ひらきて)視(み)れば

*榮花楚王の夢「さてひつきに入れ奉りて蓋かためなし奉る程は思やるべし」・大慈恩寺三蔵法師伝嘉応二年点「五棺(ヒツキ)已に掩(フタ)ヒツキの転(カネマシ)注和名抄。ヒツキ(一本)本の転。人の入る木の意(日本釈名・但言集覧名言通和訓業語施)。ヒトギの転(大言海)。(2)ヒツキ(人城)の義。キはオクツキ奥域のキに同じ(俗語考)。(3)ヒツキ(人器)の義(元文梯)。(4)ヒツケ(人筒)の転(日本古今語大辞典松岡静雄)。〔発音〕ヒツギ キ 金のヒツギ(鳥取) ●余之⑥ 国語鑑賞書

ひつき ●蓋 おおうて知る 死んで棺にふたれたからにはじめてその人の真価がわかる。●当世書

棺 〈天然上人絵伝〉

同じ。・俳諧 毛吹草六「池水はひつく木葉の時雨かな正依」・仮名草子・東海道名所記「三のどのひつき申すに、水をつんののみ」〔発面繪二〇〕
ピック〔語素〕(英 *pick*) (ピック) 大きな、大規模な、重要ななどの意を表わす。「ピック ニュース、ピック」
ピック〔名〕(英 *pick*) ① つるはし。また、ピックルのつるはし部分をいう。・火の山井上友一郎「一・三「きのうから、ピックも使って、やつとりますタイ」②ギターなどの弦をひくつめ。
ピッカーアップ〔名〕(英 *pickup*) ① つまみとること。

拾い上げること。選り出すこと。②レコードプレーヤーで、レコードの溝に刻まれている音声の波形を、電気信号の形でとりだす装置。カートリッジとトーンアームからなる。③荷台の後部の側板が開く、小型貨物自動車。④ラグビーの反則の一つ。スタラム内のボール、またはダウンされたボールを手で拾いあげること。【突箇】ツキカ所【余之】ヨリ【ひづりう】【匹偶】ヒツウ【名】①つれあい。配偶。・書

純一郎記一九此等の美人才子は尽く匹四偶(ヒツグウ)あり・詩経姜鄭風・溱洧「男女相棄、各無匹四」綯②たぐい。仲間。相手。と。③(一する)夫婦となること。結婚すること。・西洋聞見録・村田文夫前上「然れども多是男女匹偶して相ひ踰舞し」
 突雷(ツナギ)ヒッター(雷①) (古詩集書言)
 ひつこける『動』因雷崩れる。こわれる。鹿兒島県杵

子皇⁹⁸ひつくゆる。熊本⁹⁹殿下¹⁰⁰益城郡¹⁰¹ひつくくす【引括】他サ四。ひつくくる引括】に同じ。歌舞伎・御旗本進帳・六立・同類は一々引つ括して詮議をする）

ひつくくり【引括】■【名】ひつくくること。また、ひつくくるもの。咄本¹⁰²吟咄¹⁰³なわをひつくくりにして。■狂言。各流。気が強くて口うるさい妻を離縁しようとした男が、妻に離別の印を要求され、何

ておたてたといふ事には私に疑ひはない。こゝろはこれだと言つて、袋を夫の頭にすつぱりととかぶせてひっくりくり、引っぱつていく。狂言記では、「暇（いとまの袋）。**方圓**針金などの輪で小動物がはいると締まるようにした一種のわな。東京都八王子280《ひっこくり》飛脚539 静岡岡賀茂郡552《ひっこぐし》埼玉県秩父242《ひっこぐし》岩手県122 **発圓繪**②

ひっこくる」引括《他ラ五(四)》「ひきくるる」の

た人などを捕えてしげばら。捕縛する。史記抄三・補史記序「囊括は囊の口をひつくるなりぞ」*淨瑠璃国・性命後日合戦「三惡党ども引つくり」*
物事のしめくくりをする。結論を出す。③まとめてくくる。ひとまとめにする。[方言]縄やひもなどでしげる。大分県大分郡⁹⁹「ひつこくる」群馬県吾妻郡²¹⁹ 飛騨⁵³⁹ [発音] 籠²、令²、令²

ビッグクリーム【名】(英 big cream) 大試合。大規模な試合。(発音 じくゑい)

ビツクこう【一膏】(名) ビツクは美(BIG) サリチル酸を混ぜた黄色の硬い膏薬。皮膚の角化症、どの治療に用いる。

ひづるために「樞臭」形口」なぐく樞にしまつてあつたように、しみ込んだ樞の臭いがする。・浮世草子風流曲三味線一・「樞臭(ヒツクサ)き浮世を着し」ビッグ・サイエンス(名)(英:big science)原子力開発宇宙開発など国家的規模の研究費を必要とする科学。**〔究極・樞之切〕**

ひづくし【目尽】名 方言終日。宮崎県西臼杵郡98
ひつくずす【くづす】引崩「他サ四」「ひきくずす」引
崩」の変化した語。*幸若・築島「岩かむせきをくわ
つくわつとひつくづして」〔発音鑑〕
ひくくと【訓】ひどく驚くさまを表わす語。*巨海代

びつくと① **〔副〕**「びくとも②」に同じ。＊浄瑠璃・津国女夫池一「いかづちが落かっても、びつくと共思はぬ海上が」＊浄瑠璃・古戦場鐘懸の松一「びつくと共せ」

ビッグニュース『名』(英名:Big News) 世間に大きい衝撃を与える報道。また、聞く人にとって大きい意味を持つ情報。重大ニュース・邯鄲三島由紀夫「ビッグ・ニュース:ええ、それもホット・ニュース……」
*合本停産記 大岡昇平 八月一日「ビッグ・ニュースを知ってのかわとウェンディがいった」 発岸倫子

ビッグバンド [名] (big band) 比較的大編成のジャズ楽団。人数などに明確な定義はないが、一〇人以上のコンボに対していう。〔発音〕ビグ・バンド

ビッグビジネス [名] (big business) 大企業。超大企業。一般にその名に大企業とある、文目的に

ひっくくびり【引鑑】《名》「圀首をくくって死んだ者。」
くびくくり。群馬県勢多郡21 埼玉県秩父242【ひっく
びれ】山梨県502【ひっくくぶり】群馬県勢多郡南橋21

ひつくるるひ」群馬県多野郡方郷240
ひつくるるひ」引絶「他ラ四」まとめてくる。ひと
まともにする。ひつくるくる。・史記抄一七・高祖本紀
「あそこ此にあるをひつくるひてかいたぞ」・蒙求
抄一・要略の略は、干要のことを、ひつくるひて云
ぞ」[方言]①ひもなどでしはる。大分市99②首をく

くって死なせる。岩手県奥仙郡132
 ユグーベン (英 Big Ben) は建設を担当した Sir
 Benjamin Hall の名からのイギリス、ロンドンにある
 国会議事堂下院時計塔の大時計の愛称。一八六一
 年設置。【発音】ベン

ひっくくむ【引酌】『他マ四』(「ひっ」は接頭語)酒などを勢いよく器にくむ。・淨瑠璃・四天王女大力手捕軍六「一つのんでさすぞとて、ひっくくみひっくくみはしける」

ひっくくむ【引組】『自マ四』(「ひきくむ【引組】」の変

化したし語）互いに相手を押えつけようとして組み打ちをする。とつくむ。＊高野本平家・八・水嶋合戦「引組ヒツク」で海にもあるも有り。＊浄瑠璃・日本王代記「中よりくせものあらはれしんみやうとひくくみうへをしたへとかへしける」
 〔発音〕ヒツク 〔古語彙〕

文明・伊京・天・正・饅頭・黒本・易林

びっくら〔副〕「びっくり」に同じ。★人情本・閑情未摘
花「初一回」あんまり女児（むすめ）が美麗（うつく）
しいに恠（ビック）らして。★俳諧師・高浜虚子「七
五」おや塀（へい）とさんなの。びっくらしたわ
ひっくらかえす。★かへ〔引繰返〕他三四「ひっく

りかえす（引繰返）に同じ。・病院の窓へ石川啄木
「其処此処手帳を翻反（ヒックラカ）へして見てから
二三行書き出した。銀の匙（シ）前・三四・墨壺
をひつくらかへして泣く奴がある」（笑園倫文）
ひつくり「名」徳利をいう、盗人仲間（ノ）の隠語。（日本隠
語集）

ひづくり〔火造〕^名 鉄などを加熱して可塑性を持たせ、圧力を加えて所要の形に仕上げること。また、その作業。鍛造。〔例〕直ぐ鑄ぐ

びっくり〔副〕 ①(と)を伴って用いることもある。不意の出来事。また意外なことに驚くさまを表わす語。現代では多くびっくりするの形をとる。★

明本狂言・八幡の前「てっほううなどうった事はなひか」みなはじかせらるるを、そはてみてさへ、びつくりと致す物が、俳諧・鳳頭波・三笠をとりてはびつくりとする念を入ゆふたる筆は天下「一清政」・浄瑠璃・源平引范三・御船のおかげで助かったお

花申せいろに傾け、くりくり・・・人情本・春色恵の
初・四回「やがて一間をさし覗き、六・吃驚（ビック
く胸のうち）・浮雲二葉亭四迷一・六・驚（ビック
り）した顔色をして」②微動するさまを表わす語。
・淨瑠璃曾我会椿山十五・大声上てはへたれ共、びっ
くり共うごかせず、取て引しめ」・歌舞伎名歌徳三

坤玉垣三立何万騎をも持て来い。びつくりとする
 の若衆じヤアね。^{〔笑〕}金^{〔金〕}ビックリ(志摩)ビ
 ック(津軽語彙・仙台音韻・埼玉・東京・和歌山県・和
 歌山)ビツクラ(飛脚)ブツクリ(愛知)・びつくりす
 るヒツクリス(津軽語彙)ビツクリスル(信州読本・
 豊後)ベツクリスル(鳥根)ミツクリスル(愛知)・^{〔金〕}

【ク】（京マ） 〔古辞書〕書言
びっくり【《名》】信玄袋をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語
輯覧〕
ひっくりかえし；かへし〔引繰返〕【《名》】ひっくりかえ
すこと。さかさまになること。また、その状態。●

風新話 航海夜話 初・二回「カノ（丸木舟の類）が水龍巻でひっくりかへしになって」＊それから夏目漱石「五」絹帽（しるくはつと）を引繰返（ヒツクリカへ）しに、二つ並べて（発音）[○]ひっくりかえず：かへす〔引繰返〕（他サ五（四））①

上下・順序などを反対にする。④上下・表裏を逆にする。うらがえす。くつがえす。＊俳諧・文政句帖「五年閏正月」雪ともに引くく返す山田くなく。＊滑稽本「七偏人」初「あきたる口の唇をひくくか」＊矢ら、尖らせて。＊開化問答「小川為治二下」眼の玉を黒白（ヒツクリカへ）すは無理からぬ事に覚えん。⑤順序を

逆にする。＊唐詩選國字解「五言古」故事には一諾とあるに二諾と置たは下の一言にさし合ひよってひつくりかへしてをいた」①特に帳面・書物などのベージをめくる。＊一兵卒の銃殺・田山花袋「一八宿帳をひっくり返して見て」＊都会の憂鬱「佐藤春夫」＊古原

稿などをひっくりかへて見た」②立っているもの、正常の位置にあるものを横あるいはあお向けに倒す。転倒させる。＊難排未摘花「四門院をひっくりかへたが落度」＊真景景ヶ淵「三遊亭月朝」六八「大薬鐘を取つて略略覆（フクリカ）へしまった」③それまでの状態や関係性を、逆または別のものに

する。逆転させる。(4)それまでの気持・考え・態度などを急に変える。・俳諧「三千風発さがし」序「此念をそのまゝひっくりかへし順道にゆかば」・当世書生氣質「坪内逍遙」三「其志をひっくりかへして」
【関連】① シックルガエス（東京・静岡）シックルガエス（福島）シュクルガエス（水戸）ハッセルガエス（山梨）

ひっくりかえり「引繰返」名「因」山山のむこう側。尾根を越したむこう。静岡県磐田郡水窪58(ひっくり

かえし」三河011
ひっくりかえる：かへる「引繰返」〔自ラ五(四)〕
ひっくりかえる(とも)①上下・順序などが反対になる。
④上下・表裏が逆になる。うらがえる。＊滑稽本・
浮世風呂「二上」替り絵とやら申てネ、あつちへこつ
ちへひっくりかへつて、役者の早がはりの絵がござ

ります」・上海「横光利一」三六「あの子は君の裏と表をすっかりひっくり返して了つてゐるぢやないか」・「廿七」谷崎潤一郎「一〇」あんなまり口惜しいや腹の中が引くつへるやうになつてましたよつて」
 ①順序が逆になる。②立っているものゝ正常の位置にあるものが、横あるいはあお向けに倒れる。転

倒する。・滑稽本・浮世風呂「前上」ひっくりかへつてわらふ。・古道大意下「三千五百艘の船が一艘も残らず、ひっくりかへる程の事だに」。・門三味線「斎藤緑雨」二「八百屋の荷が顛覆ヒックリカへりて」③それまでの状態や関係が、逆または別のものにな

是を一つ飲で、まづ悔り虫をしつむべしと」
【動】因題目をつぶる。目ひくくつてろ「岩手県」宮城県栗原郡山田鹿角郡
ヒックル「名」ムビクルス
ひくくるかえす「カ」引繰返「ひくくりかえす（引繰返）の変化した語」「他サ四」くつがえす。
滑稽本・七編人・五・上天窓の先で小棚なる井鉢を引（ヒッ）くるかへし」「自サ四」引きかえす。もどる。人情本・閑情未摘花初一回「早々引（ヒッ）くる返（カ）へしやした」
【包】「自ラ五四」（ひっ）は接頭語）くるまる。当世書生氣質坪内逍遙九今一度馬糞にひくくるまりて
【他マ五四】（ひっ）は接頭語）ひくくるむ「引括」「他マ五四」（ひっ）は接頭語）一々にまとめてくるむ。一括する。多情多恨ツクルむだ。「他マ下二」ひくくるめる（引括）
【開箇】
ひくくるめ「引括」「名」まとめるにすること。一括。詞葉新雅「ヒックルメニミながら」
ひくくるめる「引括」「他マ下二」ひくくるむ「他マ下二」（ひくくるめる（引括）の変化した語）一々にまとめる。一括する。談義本根無草前・西施がまなじり、小町が肩、略衣通姫の衣裳の着こなし、ひくくるめる此姿」詞葉新雅「ヒックルメなへておしなへて」浮雲・二葉亭四迷・二七統括（ヒックル）めて云へばまづ上品なこしらへ」
【余之因】
ひくくるめる「引括」「他マ下二」ひくくるめる（引括）に同じ。歌舞伎・入間詞大名賢儀三ひくくらゐ、めて銭が五六十もあるかい
ひくくわえ「くはへ」引箇「他ハ下二」因ひくくわえる「くはへ」親族も罰せられること。縁坐。（和訓栞）
【他ハ下二】（ひっ）は接頭語）くわえる。浄瑠璃・傾城反魂香上・道夫がありたぶさ、ひくくはへ打かたげ」近世紀聞・染崎延房一〇・一敵の首級を一つは口に引箇（ヒックル）へ」
【火付】「名」火をつけること。特に、家屋に火をつけること。放火すること。また、その人。放火犯。結城家新法度・五六条・火付は、略はつけけるたるへし」禁令考別巻・棠陰秘鑑・享七〇・火附御仕置之事略一、火を附候もの、火罪」。社会百面相・内田魯庵・電影・七・放火（ヒッケ）撞（か）こらひを、初め略追刺ぎした事も」
【火ふた】恨みのある家に對して、放火する旨を記して門戸にはたり、近くの路上に捨てておいたりした札。火の札。火つけ札。俳諧、新增犬坂波集・油槽・雜」とし月かけて望む瀧頂

ひつけの札の主を付だせ」

ひつけ【日付】『名』文書などに、その作成または提出した年月日を記すること。また、その記した年月日・字津保蔵開上「父日記し、略時日つけしなどしておきて侍けるを」。親元日記「寛正六年七月二日口入宮内御方一行遣之日付昨廿日也」。日葡辞書「Fuzunqou(フツケラ)スル」。思出の記「徳富蘆花六一〇「免許の日附を更めて」」。『関西繪之図』(余之回)川傍柳「五江の嶋へ日づけおやちの自慢也」。雑俳「柳多留一二三百里はど有るを日づけにワキの僧」。

〔関西繪之図〕

ビッケ『名』ムヒケ

ひっけい【必携】『名』①必ず携えなければならぬこと。また、そのもの。「必携の書」。②特に、ハンドブックをいうことは。『関西ヒッケト』(繪之回)余之回「ぞりいなさま。東京都八王子280 神奈川県津久井郡松久井郡青根33」

ひつげき【火付木】『名』火を他の物に移すための一端に硫黄を塗りつけた松や檜ひのきの薄い木片。付木。『関西ヒッケギ』(繪之回)

ひつげこーていきばらひ：ティキはらひ【日付後定期払】『名』手形を支払う時期として、振出の日付後一定の期日を経過した日を満期とするもの。日付後三日月払いなど。『関西ヒスケゴテムキバライ』(繪之回)

ひつけどうぞく／＼あらためひつけどウタツク：【火付盗賊改】『名』江戸幕府の職名。老中の支配に属し、江戸市中および近郷を巡邏(じゅんら)し、放火・窃盜・博打(ばち)ぼくちの取締りとともに、その犯人の裁判をもつかさどった。享保三年(一七一八)、火付改・盗賊改、博打改の三者を合わせて設けられたが、長く先手頭(さきでか)てがしら)の出役とされ、文久二年(一八六二)は、きめて独立の役職となった。加役・火付盗賊改・火方役・火方役、盗賊并火方御改、盗賊并火付御改、火方、火付改方、盗賊改方、盗賊改などという。禁令考「前集第三・卷二八・元文四年七月二日「火付盗賊改方・集第二・卷二八・元文四年七月二日「火付盗賊改方・候通に、可心得候」。御触書「天保集成第一〇四・天保九年正月、火付盗賊改とし組之者廻給に於途中博奕致し候もの有之候は、直に召捕候て、町奉行え引渡請可被申候」。『関西ヒッケトソクラタメ』(繪之回)

ひつけどろぼう【火付泥棒】『名』放火して、その騒ぎを利用して盗みを働く者。『関西ヒッケドロボー』(繪之回)

ひつけにん【火付人】『名』放火をした犯人。・上杉家文書「永祿七年四月二〇日・上杉氏柏崎町中制札室」(大日本古文書一・四九六)或盗賊、或火付人等申出族、一段可成褒美事」。

〔関西繪之図〕

ひつけふだ「火付札」《名》「ひつけ（火付）の札」に同じ。俳諧「鷹筑波」一風にまかせてかけおちぞする。ねたまあるあひての家に火付ふた長次」
ひつけへんこせん ひつけへんカク：「日付変更線」《名》日付を調整するため、ほぼ一八〇度の経線に沿って太平洋の中央に引かれた仮想の線。これを西から東へ横切るときは同じ日を繰り返し、東から西へ横切るときは一日省略する。〔発音〕ヒズケヘンコーセン
ひつけやぐ「火付役」《名》火をつける人。転じて、問題や事件を起こすきっかけの役割を演じる人をいう。類。〔発音〕ヒツケ
ビッケル《名》（Picket）杖の先につけるはし状の金具をつけた登山用具。氷雪上に足場をつけたり、すべるのを防いで体を支えたりするのに用いる。国民歌謡「軍国登山の歌」中林唯夫「おいらビッケル担へ銃」・水壁「井上燭三岩と岩との間にビッケルをささし込むようにして立てて」〔発音〕ヒツケ
ひつけん「必見」《名》必ず見なければならぬこと。また、そのもの。〔発音〕ヒツケン
ひっけん「筆巻」《名》文を作ったり文字を書いたりするのにあきること。・南史「王筠伝、其自序云、余少好抄書、老而彌篤、雖一遇見警範、皆即疎記、後重省覽、權興淵深、習与性成、不覺筆巻」〔発音〕ヒツケン
ひっけん「筆健」《名》詩文を作る才能がすぐれていること。詩文に達者なこと。・羅隱「投前夏口章尚書啓、陳琳筆健、瑤瑤爲簪」〔発音〕ヒツケン
ひっけん「筆硯・筆研」《名》①（ひっけんとも）筆と硯（すすり）。・日蓮蓮文「聖愚問答鈔」下「武具をば硯て筆硯を提ん事」・運歩色葉「筆硯 ヒツゲン」。・日葡辞書「Esgaon（ヒツケン）。フデスズリ」。・福翁百話「福沢諭吉四七「封建武士に武芸を禁じ、学者の筆硯書籍を取揚るに等しく」こと。また、その文章。文筆。・菅家文章十五惜幾ど、各分一字、筆製序「自非就簾下、而引絃歌、繞殘刃而尋筆硯と・俳諧五車反古序「筆硯の業を廃することひとひ筆さし」。・後漢書「班超「大丈夫、略当效傅介子、張騫、立功異域、以取封侯、安能久事筆研間乎」③書簡文で文筆に従事する者の起居などという語。「筆硯益々御清適の段」〔発音〕ヒツケン
ひっけんを新あらたにする 従来の構想をがらりと変える。〔発音〕ヒツケン
ひっけんこんこ《名》〔周〕片足ではねる遊び。片あしとび。・神奈川県郡筑部282「ひっけんこんこ」埼玉県入間郡283「ひっけんけん」鹿児島県指宿郡978「ひっけんけん」佐賀県唐津916・長崎県彼杵042「ひっけんけんぎょ」福岡県早良郡900「ひっけんぎょ」佐賀県藤津郡916・長崎県南高来郡926熊本県天草島954
ひっけんしやうじん：「シヤウチン」〔筆硯生塵〕《名》（久しく使用しなかつたため、筆や硯すずりが塵をかく

にさせるの意(から)「ひっこます(引込)」に同じ
〔開箇〕金(フ)クマハル「津軽ことば」**〔繪〕**④
ひっこみ「引込」**〔名〕**①退いて中へ入ること。またその場から立ち去ること。*滑稽本・浮世風呂四上、あの女に入れ上げて、漸漸内へ引込(ヒッコミ)の、昼も簞笥の環が鳴るといふ世界さ②物事から身をひくこと。事をすませて関係のない身となること。引退すること。また、その人。*俳諧・類聚集仁「入道へ略々牢人の引込(ヒッコミ)はいふに及ばず」③油地獄・金斎藤藤雨六「落籍(ヒッコミ)の多いのは決して景気のいいのでは御在ません」④舞台から役者が退場するとき。特に、能や歌舞伎で、役者が退場する際の芸。*竹沢先生と云ふ人長与善郎⑤竹沢先生とその兄弟「四、あの長い橋がかりの引込み(ヒッコミ)に失つて」⑥損失。食い込み。⑦「ひっこみし」みはぬふ事に勝繰るにまけ」*雑俳・柳多留九「引こみ未だ引こみの頃よりして、座敷持つまで種々」⑧**〔刀〕**の鞘の上置い。**〔開箇〕**繪之④金之④
ひっこみがつかない 途中で引き返したり、途中で関係を断つたりすることができない。行き掛り以上、身を引いたり、意見などを取り下げるのがしにくい。*今年竹里見里夏霜枯「四、引込みみすかなくならんうちに金子市之丞は退散といたしたか」*暗夜行路 志賀直哉三・一八「小さい医者者は引(ヒッ)込(こみ)のうぬ形で弱つて居た」
〔開箇〕ヒッコミガツカナイ **〔繪〕**④
ひっこみをつける その場をうまい具合にして退く。*今年竹里見里夏霜枯「八、それを潮に、どうやら引込みをつけて略出て行つて了つた」
ひっこみがち「引込勝(形動)〔がち〕は接尾語」①家にこもつて、ほとんど外へ出ないさま。*当世書生気質・坪内逍遙八「自然奥の方へ引込がちになつて」②進んで事にあたる意気の乏しいさま。*銀の匙 中勘助 前四二「氣おくれがしてとくくひっこみがちにしていたが、哀しき父・葛西善蔵一「孤独な引込み勝な彼は」**〔開箇〕**ヒッコミガチ **〔繪〕**④金之④
ひっこみかぶる「引込壳(名) 江戸、吉原の遊郭で、内証(主人の部屋)に置いて芸事を習わせるなどして、新造または部屋持以上の遊女となる準備をさせせる壳。*北里見聞録三・「洒落本、陽台三略」ひっこみかぶるの爪はなさせ御遣し可被成候」*雑俳・柳多留三・五「鳶風のかい引込壳なり」
ひっこみきざ さま「引込際(名) ①「ひきざわ(引込)際」に同じ。②舞台から退場する際。*雑俳・柳多留四「脇の僧引ッこみきざわのてれたもの」**〔開箇〕**ヒッコミキザ **〔繪〕**④
ひっこみさんじゅ ①サンヂュウ「引込三重」(名) 歌舞伎の下座音楽で、幕切れなど、主要な役が舞台から退場するとき奏されたもの。引込みに用いた合方

ひっこみじあん【引込思案】《名》(形動) 小心で、積極的に人前に出たり行動したりすることができない性格。また、そのさま。ひきこみじあん。*仮名草子・長者教「ものかかす、とんでふかんで、ひるねして、ひっこみしあん、ひやうしやなまかは」。*俳諧・桜川秋二「虫も穴に秋はひっこみ思案かな」。*学問のすゝめ・福沢諭吉「一七人望論(後世無氣無力の腐儒は略々引込み思案)のみに心を凝らす」。【関連篇】余之へ引っこみじえ【引込紫衣】《名》 浄土宗で、紫衣を着ることを許された寺のうち、その住持が昇進して本山の住持になれない七寺をいう。引込紫衣寺とも。*雑俳・川柳評万句合明和七宮「かるやきは引込紫衣のまへかよし」。*諸宗階級「上引込紫衣七ヶ寺金戒光明寺・略・誓願寺」・狂歌「千紅万紫引込紫衣の隠居となりては洪洞扇をばうちちす」。ひっこみしぎ【引込主義】《名》 ①家の中にとじこもって、外出しないことを旨とする考え方。②2万ノ事を探えめにし、進んでことにあたらないようにする主義。【関連篇】ヒッコミシユギ【ひっこみしょう・シヤウ】《引込性》《名》(形動) ひっこみしょうの性分であること。また、そのさま。【関連篇】ヒッコミシヨウ【ひっこみしんぞう・シンザウ】《引込新造》《名》 江戸、吉原の遊郭で、引っこみ禿から新造となつて、まだ突出しの披露をしない間の者の称。*歌舞伎・浮世柄比翼稲妻(朝旦)二幕「三浦屋女房お高、引込(ヒッコ)み新造(シンザウ)花山」。ひっこみせん【引込線】《名》 「ひきこみせん(引込線)」の変化した語。【関連篇】ひっこみだんりん【引込檀林】《名》 近世、関東の浄土宗寺院の寺格の一つ。関東十八檀林を出世檀林とよぶのに対し、昇進しても知恩院・増上寺に出世できない三河大樹寺・駿河宝台院・江戸芝西久保天徳寺・江戸浅草誓願寺の四寺をさしている。【関連篇】ひっこみちようにん【チャウニン】《引込町人》《名》 武士の身分を捨てて町人となつた人。*仮名草子・可笑記五当世の侍略「引こみ町人となりて、遊山なぐさみ、女房くへる、略我儘にありきたきとの願ひ」。ひっこみどころ【引込所】《名》 俗事を避けて隠れ住む所。商売をやめて生活する所。また、子孫に家督を譲つて退隠する所。隠居所。ひきこみどころ。*浮世草子・世間胸算用一・「丹波に大分田地置置、引込(ひっこ)み所拵らへけるは」。*古今集遠鏡上六「まき、世のうい時のひっこみどころにせうに」。【関連篇】ひっこみなまけ【引込怠】《名》 なまけて家でぶらぶら

らしていること。・唐詩選国字解 五言古財宝を贈
 納めて、家をなし 引込息も有さうなものを」
 ひっこみにやうどう：ニフタウ引込入道《名》隠居
 して僧の姿になった人。・浮世草子・好色二代男「六
 四」引込入道（ヒッコミニウドウ）、式千貫目の、家徳
 是有ながら」
 ひっこむ【引込】■【自マ五四】（ひきこむ【引込】
 込）の変化した語）①内にはいつて外に出ない状
 態になる。・史記抄三・五帝本紀「民も夏は出て冬は
 ひっこでいるぞ」・俳諧・崑山集六夏「わきづばの
 汗はひっこむ泉沢友三」・浮世草子・傾城禁短氣
 四・三太夫の小主が、久しく引込（ヒッコ）勒（
 とめ）ざる子細を知ったか ②目立たない所に退
 く。閑居や引退をする。・天草本平家四・一ノチニ
 ワカタイナカエ Icedide（ヒッコウデ）イノチバカ
 リヲイキテイマラシタ・滑稽本・浮世風呂三・ト
 「賀の祝と一緒に、赤飯を配って引込（ヒッコ）む覺町
 だが」・人情本・春色辰巳園後・七回上「引込（ヒッコ）
 らる前あり」 ③引つ込み壳になる。・人情本・仮
 名文章娘節用・初・二回「此の頃まで引つ込んで居り
 ましたが」 ④しりこみする。ぐずぐずする。 ⑤
 中が低く落ち込む。くぼむ。・当世書生気質・坪内逍
 遙二「眼はすしし四（ヒッコ）たる方にて」 ⑥後
 方へ退く。後ろに下がる。奥へはいる。・石山本願寺
 日記・宇野主水日記・雜記・高野山參詣 天正八年九月
 「大塔あたりへ略金堂の東に北へ少しひっこふてあり
 ⑦売師が仕入れ値よりも低くなる。欠損に因る。く
 いこむ。・滑稽本・浮世風呂四・中「本直が四貫宛も
 引（ヒン）込まアナ」 ⑧他「マ五四」（ひきこむ
 【引込】）の変化した語）①仲間に加える。・歌舞伎
 四天王楓江戸粧・五立「何ぞの時の替へ玉に、引（ヒ
 ッ）込（コ）んで置かい」 ②帽子、笠、頭巾など
 を深くこめる。・寛永版倉我物語五・五郎と源太と
 喧嘩の事「深き義に綱笠深くひっこみ」・義経記
 二・義経鬼「一法眼が所へ御出の事「頭巾耳の際までひ
 っこんで」・幸若・信太「あみがさふかふかとひっこ
 ふたる男」 ③他「マ下二」もひっこめる（引込）。
 〔関連金〕シッコム（静岡）スコム（山形）スコム（富
 山県・福井大飯・岐阜・伊予）ヒコム（岐阜）フコム（津
 軽ことば）フコム（津軽語彙集・秋田鹿角）ハツコム（紀
 州）・鶴・金之ひっこめる【引込】他「マ下二」ひっこむ【他「マ下
 二」】（ひきこめる【引込】）の変化した語）①引いて
 中へ入れる。また、一度出したものをもとにもどす。
 ・童謡・お山の杉の子「吉田テフ子」びっくり仰天 杉
 の子は おもはずお首を ひっこめた ひっこめた
 ・自由学校・金鶴子文六「自由を求めて「じゃあ、こうし
 ましよ。この金は、あたしが、引つ込めます」
 取り消す。とりかえ。解消する。 ②下げた低く
 する。・藤間・森嶋外「遙かに道から引つ込めて立て

た、大きい門がある」〔開園金〕スコメル〔伊予〕
〔金〕余之図 〔ひつこも〕余之図

ひつこも〔引籠〕自ラ五四の「ひきこもる(引籠)」の変化した語。・日葡辞書「Fleomor, ru, ota (ヒコモル)」。古今集遠鏡六、吉野の難所な山のおくへひつこもらうぞ」〔開園金〕余之図

ヒッコリー〔名〕(Hickory) 植物「さくぐらみ(沢胡桃)」の英語名。公園樹庭園樹としてよく見られ、材は良質の家具や機器具・スキー板に、果実は食用になる。・市川豊田三郎「極上のヒッコリーや、綿金や小物も精選して」〔開園金〕余之図

ピッコロ〔名〕Picollo は Piccolo (小さいフルート)から。木管楽器の一つ。フルートより小さく、八度高い音を出す。管弦楽の最高音部を担当し、音色は明るく鋭い。・著音機全寺田寅彦「ピッコロのやうな高音楽器」〔開園金〕余之図

ひつこわす。こはす〔引籠・引毀〕他サ五四の「ひつこわす」勢よくこわす。・化銀杏泉鏡花「二、私や直つぐ引毀して、結直して見せようわね」〔開園金〕ヒカラス(静岡)〔金〕余之図

ひつこん〔筆痕〕名。筆のあと。筆で書いたあと。筆跡。・俳諧本朝文選十五・類聚・五老井記許六「世上子が筆痕を棄て」〔開園金〕余之図

ひつさ〔副〕因園久しく。長い間。滋賀県甲賀水口「ひつさに会わん」67 京都府624 兵庫県佐用郡650 岡山県734 高知県ひつさに御無沙汰をしました」847(へつさ)福井県大飯郡676 岐阜県揖斐郡535

ひつさい〔筆才〕名。文章を書く才能。文才。・花柳春話織田純一郎訳二「我が伊太利国民は文事に疎く筆才(ヒッサイ)に乏く」・文心雕龍「時序・庚以筆才・逾規・温以文思・益厚」〔開園金〕余之図

ひつさいばん〔筆彩本〕名。筆で彩色を施した書物。〔開園金〕余之図

ひつさかれ〔引裂〕名。「ひきさかれ(引裂)」の変化した語。・浄瑠璃・蘆屋道満大内鑑「三ヤアほざいたり、引つさかれめ」

ひつさき〔がみ〕〔引裂紙〕名。「ひきさき(がみ(引裂紙))」に同じ。・雑俳・折句大全「しらぬ道ひつさき紙と猿田彦」

ひつさきばおり〔引裂羽織〕名。背の腹下の部分を縫い合せて仕立てた羽織。武士が主として旅行・乗馬の際に用いた。背裂き羽織。ぶつさき羽織。〔開園金〕余之図

ひつさきばし〔引裂箸〕名。割り箸のこと。・黄表紙「金々先生造化夢」角箸の転んだ事にも腹を立ち、ひつさきばし夫婦喧嘩」〔開園金〕余之図

ひつさきめ〔引裂目〕名。引き裂いてあける部分。・黄表紙「江戸生艶気権上」ひつさきめに口紅のついているのは、いつでも地者のふみではねへさ」〔開園金〕余之図

ひつさきもといひ。もといひ〔引裂結〕名。「ひきさきもといひ(引裂結)」に同じ。

ひつさく〔筆作〕名。文章に書き表わすこと。また、そのもの。・吾妻鏡「正治元年一月二七日、仲業宿意欲違、雖不堪盡勵筆作云々」・拾玉得花「舞袖の一指、足踏の一響にも、序破急あり。是は、筆作(ヒッサク)に不及。口伝有り」・滑稽本「続読栗毛」初序「かの龍頭蛇尾の筆作(ヒッサク)にして」

ひつさく〔筆削〕名。字句を書き加えたり、けずり去ったりすること。添削。・本朝文粹一三「為左大臣供養淨土寺願文大江匡衡」淡海公草「草詔勅筆削律令與弘法・詳・帝範」・色葉字類抄「筆削ヒッサク」・吾妻鏡「正治元年一月二七日、件状可為誰人筆削哉」・日本開化小史「山口卯寺四・七」取捨筆削の智を用ひたる所なきが如し」・管書「皇清謚伝論」留「情筆削、敦悦三丘墳」〔開園金〕余之図

ひつさく〔引裂〕他カ五四の「ひきさく(引裂)」の変化した語。和玉篇「裂ヒッサク」・日葡辞書「F. B. B. (ヒッサク)」。または、ヒキサク。・大淵代抄「水墨の図をひつさいしてすたこと」

ひつさく〔ヒツサ〕名。または、ヒキサク。・古道大意下「金太郎といふは、略略熊や狼を引撃(ヒツサ)たの」〔開園金〕余之図

ひつさく〔鹿〕名。鹿兒島県鹿野郡798(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 埼玉県秩父郡242 東京都八王子280 伊豆八丈島315(ひつさく)・岩手県気仙郡132 埼玉県秩父郡242 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 熊本県天草島954(ひきさく)・熊本県天草島955〔開園金〕余之図

ひつさげ〔引提・提刀〕名。腰刀より長めにこしらえた刀。多く、手にさげるところからいう。・連歩色葉「提刀ヒツサゲ」・武家名目抄「刀剣部・引提・北上記云つは刀又はひつさげを給候と云よりは」〔開園金〕余之図

ひつさげ〔食物〕名。運ぶ提げ柄のついた箱。・吾妻鏡「神祭の時に客に出す甘酒を入れる漆器。鹿兒島県肝属郡高山044 ③樹木、あかめがしわ(赤芽柏)。鹿兒島県鹿屋020(ひつさげのき)宮崎県021 鹿兒島県肝属郡999 ④提げつる」〔提鉗〕名。提(ひきさげ)につけた鉗つる。・源平盛衰記四六・頼朝義経中達「提鉗(ヒツサゲツル)を焼きて」

ひつさける〔引裂〕動。因園裂ける。破れる。仙台6(ひつさける)茨城県久慈郡201

ひつさげ〔引下〕名。引下(ひつさげ)の変化した語。①手にさげて持つ。たずさえる。携帯する。・太平記一・頼貞回忠事「二十四差たる胡藤と、繁藤の弓とを提(ヒツサケ)て」・滑稽本「七編人三・上二天窓(あたき)を持て提下(ヒツサ)げられる様なのが掣(ヒツサ)げて」②かかげる。提示する。・西国立志編中村正直訳「一・四三」この編を終るに臨み、要領を提

(ヒツサくべし) ③ひきつれる。ともなう。つれる。・当世書生氣質「坪内逍遙八」佳人を掣(ヒツサ)げて逍遙するも」④事を行なうのに、力になるものとしてかかげる。〔開園金〕余之図

ひつさく〔ヒツサゲル〕動。余之図 〔ひつさく〕ヒツサゲ 〔ヒツサゲル〕余之図 〔ひつさく〕ヒツサゲ 〔ヒツサゲル〕余之図

ひつさく〔比都佐神社〕滋賀県蒲生郡日野町にある神社。旧県社。祭神は彦火火出見尊(ひこほはみのみこと)ほか。〔開園金〕余之図

ひつさく〔必殺〕名。相手を必ず殺すこと。また、どうして殺そうという意気込み。〔開園金〕余之図

ひつさく〔筆札〕名。①筆と紙。筆牘。筆紙。・本朝文粹一・大極殿成命宴詩序三「善清行乃置杯觴、使領筆札」・史記「司馬相如伝」上「許令尚書給筆札」②筆跡。手跡。転じて、書法。・続日本紀延暦四年七月庚戌三「船性識聰敏、涉覽群書、尤好筆札」・本朝文粹一八・冬日可愛詩序「橋広相」令「枝中亟」毎句以三文章筆札、第其高下と、陸機見原後謝表「臣以職在中書、制命所出、而臣本以筆札見知」〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

ひつさく〔引捌〕他カ五四の「ひつさく」引き裂く。強く裂く。ひきさく。・雑俳・川柳評万句合「宝曆一・二・義四」石筆の無い角力見は引つさきき」・歌舞伎「お染久松色流販子幕」此半の肩を引つさばいたね」〔ひつさく〕紙をひつさばく新島襄242 長野県下伊那郡533(ひつさく)・茨城県稲敷郡204 栃木県塩谷郡297 群馬県馬場郡233 東京都八王子280(ひつさく)・福島県会津郡181 群馬県佐波郡236 東京都八王子280 神奈川県津久井郡286 新潟県中頸城郡427 山梨県538(ひつさく)・山形県村山110(ひつさく)・群馬県勢多郡233〔開園金〕余之図

<

紙「ヒツシニツクシガタシ」・浮世草子・男色十寸鏡上「衆道の玄妙にして有難事は、言古道断、筆紙におよびがたし」・浄瑠璃・最明寺殿百人上臈・含み状「万端筆紙につくしがたし」(国語学文庫)

ひつし「筆詞」名「ふでやことは」・仮名草子・可笑記「三筆詞にも及びがたきほどの大極殿をつくり」(国語学文庫)

ひつじ「未」名「①十二支の一つで、その第八番目。拾遺・物名・四三〇「むま、ひつじ、さるとり、いぬ、むまれよりひつじつれば山にさるひとりいぬるに人るていませよみ人しらす」・名語記八「十二神の未如何、これは前々申か如く尺には未者味也」②を年月日、方角、時刻に配して、その呼び名とするもの。③④にあたる年や日。歌舞伎・船打込橋間白浪・錦掛松「序幕」わたくしは未でござります」『ええ年を聞くのではない』・細雪・谷崎潤一郎「上四「未年(ヒツジ)の生れ」⑤南から西へ三〇度寄った方角。南南西。色葉字類抄「未・ヒツジ」・方丈記「この風、ひつじの方に移りゆきて」⑥現在の午後二時頃。また、その後二時間。一説に、その後二時間未の刻。未の時。蜻蛉・中・天祿元年「ひつじの終はりばかりに、はてぬればかへる」・源氏・藤裏葉「ひつじくたるほどに南の寝殿にうつりおはします」⑦陰曆六月の異称。⑧未は十二支の八番目にあたるところから。数の八をいう、古本屋仲間の符丁。國語(1)日の西へゆく辻の意で、ヒツジ(日辻)の義(日本積名和訓・紫門和語類集)。(2)ヒツ(軋)の義で、それは助言(言元梯)。(今史平安・鎌倉)●●●余之回(国語学文庫)・下学・和玉文明・伊東忠孝・藤原・易林

ひつじの食「い破(やどり) 未の日は相場に大変動があるということ」

ひつじの刻「く」・「ひつじ(未)②」に同じ。

ノコク「・浄瑠璃・本朝二十四孝「ヤアこの永の日を待つこと叶はぬ。しからば未(ヒツジ)の上刻まで」(国語学文庫)

ひつじの時とき「ひつじ(未)②」に同じ。

・統日本紀「天平一三年三月辛丑、毎日辰時始末、未時散去」・宇津保春日詣「二十三日のひつじの時ばかりに」・源氏・螢「ひつじの時にむまばのおとどにいで給ひて」

ひつじ「羊」名「①ウシ科の哺乳類。ヤギに近縁で、多くは羊の毛を生かす。体には柔らかく長い巻き毛が密生。古くから家畜として飼養。毛は羊毛と呼ばれ毛織物の原料になるほか、肉・乳皮も利用される。草食性で、性質はおとなしく群をなしてすみ。品種が多く、用途によって、メリノ種などの毛用のほか肉用、毛肉兼用、乳用などに分けられる。世界各地で飼育され、特にオーストラリア、南アメリカなどに多い。日本でも明治以後に飼育が始め

られた。めんよう。・書紀・推古七年九月「百濟、駱駝一匹、驢一匹、羊二頭、白雉一隻を貢り」・十卷本和名抄「七・羊・羊子附・兼名苑云紙八音低」一名麤(音歴)比都之「羊也羔(音高)一名野八音辛」羊子也。・成母集「そこに三日の風なくてあるに、はじめてひつじの多かるを見る」②①は紙を好んで食うところから。紙のこと。・洒落本・通人三國師・発端「こにはなし地の硯箱」といひながらおろして、ときにひつじは中橋かね」③(紙)かみを同音の髪(かみ)に通わせて、髪結いまたは髪結床のことをいう。・滑稽本・浮世床・初・序「かみあんどん」とは髪結の訛れから、これをいふも「ひつじ」と呼ぶを、羊(ヒツジ)のかみをすくといふより、称へ来るとおぼえる」・洒落本・色深猿・夢・序「髪結ヒツジ」村間の類ひに身を任せ」・歌舞伎・船打込橋間白浪・錦掛松「序幕」その生業がひつじで、髪結だと申すのでござります」④頭髪をいう、盗人・てきや仲間の隠語。『隠語輯覧』●能楽の曲名。唐土の桂陽國王秘蔵の羊を盗んだという夫婦。その子のころは、帝に訴え出て、その功として両親の助命をいひ、許される。魔曲。國語(1)十二支の未から、未の時は日が西へさがる通路すなわち、ヒツジ(日辻)の義(日本積名和訓・紫門和語類集)・名通・本朝辞源「田田甘々・大言海」。(2)ヒツ(軋)の義(大言海)。(3)居所へ引かれる羊の像をいうヒキダス、シニの反。またハヒ、ヅル、シニの反(名語記)。(4)ハヒヒゲシ(愛小生)の義(日本語原学・林義臣)。(5)ヒツはヒゲシの意。ツは助辞。ジはウシ(牛)の略(外来語の語源新出)。(6)ヒツキの祭にウシ(死)の意。中国で天子が行なう祭の時殺すことから(和言解)。(7)朝鮮の古代方言から(東亜語原語新出)。(8)鳴声から(羊の語源手塚昇一「方言第七巻第十号」)。(9)羊の毛は剪って反生するところからヒツジ(種)の義か、また、ヒツと関係あるか(中山丙子説「郷土研究第四巻第二号」)●●●余之回(国語学文庫)・下学・和玉文明・伊東忠孝・藤原・易林

ひつじの虎「とら」を仮(か)る。「法言・吾子」の「羊質而虎皮」から。外面ばかり立派で内容の伴わないたとえ。また、他人の権力をかさに着るたとえ。

・本朝文粹・八・賦山晴秋望多詩・藤原惟成・商風望・山之晚・還趾・羊坂・飯・文」

ひつじの歩「あゆみ」(「北本涅槃經」三八)の「如・因趣・市歩近・死。如・牽・羊・詣・於・屠・所」とから①屠殺場にひかれてゆく羊のような、力ない歩み。刻々、死に近づくこととたとえ。屠所の羊の歩み。・源氏・浮舟「ひつじのあゆみよりもほだなき心地す」・千載雜下・一一九七「けふもまた午の只こそ吹つなれひつじのあゆみちかづきぬらん

赤染衛門」・謡曲・祐「羊の歩み隙の駒、羊の歩み隙の駒、移り行くなる六つの道の、因果の小事の」②歳月。光陰。・日葡辞書「Futuno sumi」ヒツジノアユミ。すなわち、クワウイン「訳」時」(国語学文庫)

ひつじ 経て来る 大阪など近畿地方へ行くことをいひ、盗人仲間の隠語。『日本隠語集』

ひつじを駆って虎(とら)と闘わす 弱い者を強い相手に立ち向かわせる。危害がたちどころに至るたとえにいう。・警諭尽八「駆羊ヒツジヲカッテ与虎(トラ)闘(タカ)はしむ」

ひつじひつち「種」種「名」(古くは「ひつち」)刈ったあとの株から、また生える種。また、それになる実。ひつじいね。ひこばえ。・季・秋・古今・秋下・三〇八「刈る田におふるひつちのほにいでぬは世を今更に秋はてぬとかよみ人しらす」・十卷本和名抄九「種」唐韻云種ハ音呂於呂加於比俗云比豆知自生種也」・伊京集「秋再来ヒツジ」・日葡辞書「ヒツチゴメ、または、Futuno(ヒツチ)ノコメ」・古稀春風・富安風生「昭和三年らんんと落日もゆる種ヒツジかな」●●●余之回(国語学文庫)・下学・和玉文明・伊東忠孝・藤原・易林

ひつじ「名」(因)植物、つじ「露」露。新潟県西頸城郡42 長野県西頸城郡52 島根県邑智郡柏瀬川

ひつじあぶら「羊脂」名「ようし(羊脂)に同じ。●●●余之回(国語学文庫)・下学・和玉文明・伊東忠孝・藤原・易林

ひつじいね「ひつち」種「名」(ひつち)に同じ。

・永久百首秋「そしる田のわき田かりての稗いねはのさらさら」に秋と見ゆらふ藤原仲実」・秘密安心又略「ひつち稲のみさお念仏へ略」だらばらばらばらまいるたりとも妙なる芽はおひはせ」・歌舞伎・容賀扇曾我「三立」貧は諸道の妨けも頼み得ならぬひつじいね

ひつじいれ「羊入」名「紙入・財布をいう、盗人仲間の隠語。『日本隠語集・特殊語百科辞典』

ひつじかい「かひ」羊飼「名」羊を飼う人。また、放牧の羊の番をいう人。・日葡辞書「Futuno(ヒツジカイ)」。あめりか物語・永井荷風「旧恨」山道の岩の上に幼い羊飼一人」(国語学文庫)●●●余之回(国語学文庫)・下学・和玉文明・伊東忠孝・藤原・易林

ひつじがゆ「羊粥」名「羊の肉を入れて煮た粥。・浄瑠璃・天神記「唐人流の料理人を呼び寄せ、鶏飯羊粥(ヒツジガユ)家の焼皮」(国語学文庫)●●●余之回(国語学文庫)・下学・和玉文明・伊東忠孝・藤原・易林

ひつじし「引」引「名」(ひつじ)は接頭語「強ひく叱る。・雑俳・柳多留「二」ばけもののはなしをじ

ゆ者は引つ叱り」

ひつじ「引」引「名」①毛皮などに緒をつけ、腰に結んでする時に動物とするもの。腰当て。尻皮。・史記抄「一・蘇秦「久しくあいてもせず、帰しめしでをいたほどに、ひつじきをして門にいたれば」・俳諧・犬筑波集「雑」けのある物はささぬ成けりひつじきも高野ひじりは紙にしろ」・武雑記「ひつじ申は常に付候を申候也。豹虎の皮をば平人は斟酌之事に候。三職は御用候。ひつじ敷は寸法候まじく候」②一般に、動物。ひしきもの。・浮世草子・西鶴織留「一・三茶縹子の引敷(ヒツジキ)」③①から転じて、腰または尻をいう。・浄瑠璃・鳥帽子折四「成仏せよと拝み打、頭よりひつじき迄弓手馬手へぞさばける」④「ひつじき(引敷の板)の略。・太平記「三・京車事「馬は南部が引敷(ヒツジキ)の下に在ながら」・幸若・高たち「四枚かなとう、ひつじき、くさすり、ふたつにさつときりわられて」(国語学文庫)

ひつじき「板」いた「草」草「きざり」・鑑(よろ)の後嗣に垂下する草摺。ひつじき。ひしき。・太平記「二九 越後守白石見引返事、道口に郎等落重て陶山がひつじきの板を置上」・本朝軍器考九「凡草摺は前と後と射向とに合せて三枚あるべし。前をば前板といひ、後をば引敷の板といふ」

ひつじき「引敷」引敷「名」頭に物をかぶるため、髪型が崩れないように髪を引きまとめた女髪。・雑俳・宝の市「塗笠で引し髪をのびみつと」

ひつじき「引敷」引敷「名」狂言。各流。婿(むこ)入りにあたって花婿は、知人に袴はかきを借り行くが都合がつかない。しかたなく、素襦子おうを借り、袖に足を通して袴の代わりとし、後ろの見苦しさを隠すために引敷(腰当て)を当ててでかける。そして、婚家で見つけられて、恥ずかしさのあまり逃げろ。●●●余之回(国語学文庫)・下学・和玉文明・伊東忠孝・藤原・易林

ひつじし「引敷」引敷「名」(ひつじ)は接頭語「強ひく叱る。・雑俳・柳多留「二」ばけもののはなしをじ

ひつじく「引敷」引敷「名」(ひつじ)は接頭語「強ひく叱る。・雑俳・柳多留「二」ばけもののはなしをじ

ひつじく「引敷」引敷「名」(ひつじ)は接頭語「強ひく叱る。・雑俳・柳多留「二」ばけもののはなしをじ

ひつじく「引敷」引敷「名」(ひつじ)は接頭語「強ひく叱る。・雑俳・柳多留「二」ばけもののはなしをじ